
OLFEED ~ギルド職員の仕事~

藤原無穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

OLEED ～ギルド職員の仕事～

【著者名】

藤原無穂

N7196W

【あらすじ】

オルフィード大陸に広く存在する仕事斡旋機関”ギルド”に就職した1年目の新人がする仕事・・・なんて全然無かった。暇だ暇だと呪文のように唱える毎日。色々とトラブルが起こる中、浮浪児を育てるようになりました？

ママな仕事（前書き）

「」の作品は、読みにくさをMAXに設定しております。

性的な描写やいわゆるH描写、萌えみたいな描写はございません、
口メテイータッチの笑える描写、愉快で痛快な描写はございません、
”戻る”か”閉じる”ボタンを計画的にご利用ください。

海に囲まれた広大な大地、オルフィード大陸。地図で見ればひし形を少し歪めたような大陸。東西南北にそれぞれ大国があり、大陸の中心にエクセリアという大国があった。エクセリアの東端に位置する街、リザリア。ここにもオルフィード大陸全土に張り巡らされた仕事斡旋機関、ギルドがあつた。

ギルドはありとあらゆる仕事を対価とともに引き受け、これをギルドに登録している者に受けた対価の一部を報酬に斡旋する。言わば、何でも屋の仲介業者である。どんな仕事も仲介することから、傭兵の斡旋やアイテム探しに人探し、収穫の手伝いなどは当たり前、その組織ネットワークの大きさから情報の売買も行い、果てはならず者への宿の貸し出しもしていた。

ともすれば、犯罪者やならず者の巣窟のように誤解を受けそだが、公共機関のような厳格さがそこにはあった。その一つとして、犯罪者に懸賞金を掛け公布するのもギルドの役割だった。もちろん懸賞金には国の公金や被害者遺族からの献金で賄われている。

ギルドは魔法通信システムという独自の技術を使っていて、斡旋業の補助や賞金首の照会に情報の販売も、この魔法通信の端末を使用させるほどの技術力をもっている。

ともかく、情報力という点において大国ですら並び立つ事が無いほどであった。

中央エクセリア国の中端、リザリア。

エクセリアと交易の最も多い、東の大國イーリアとの国境に程近い街。両国の交易業者が頻繁に立ち寄るために宿と厩舎を提供する者が多く、繁華街が大きく夜にもなれば騒々しいほど賑わうが、昼にはせせこましく商隊が大通りを行き交う。だがそれ以上に目立つ

のが町全体を覆い隠すように大きな防壁が囲んでいる事だ。また軍が駐留するための基地があり、防壁の効果も手伝つてか治安がよかつた。

物流の中継点、商人たちが立ち寄り休息をする場所を求めるのだから、治安は良いに越した事はない。だが、日に入れ替わる人の数がこれだけ多い街で、治安が良いというのは珍しい。

もつとも治安のためのというよりも、東のイーリアへ睨みを利かせているという背景が強いのかもしない。実際、軍備もそれなりに大きく、至る所でエクセリア軍人を見ることが出来る。

だからか、リザリアは商人のオアシスと呼ばれている。

リザリアのギルドには商人がよく訪れる。毎日違う商人が出入りする。

商隊の護衛を雇うことは、中継点であるリザリアでは滅多に無いし、この街で一番の顧客である商人が求めるようなサービスや道具は、専門店が立ち並んでいるから、ギルドで商人がする事といえば情報を売り買いしていくくらいだ。

魔法ネットワーク端末、台上的操作パネルの上部に位置する青い魔法立方体からキューブと呼んでいる。このキューブで商人が情報を閲覧する。情報を売っている商人もたまに見かけるが、キューブを使った魔法通信で行うので、実際に僕たち、リザリア在中のギルド職員がする事はほとんどない。今も何かの情報を売った商人風の男に銅貨を3枚渡したところだ。ハツキリ言って、暇だ。

お金といえば、キューブで情報を買う時にキューブに金貨・銀貨・銅貨を入れるんだけど、内部に簡単なセンサーがあるだけで、後は重さでそれぞの硬貨と判断するらしい。サイズと重さが一緒なら同じ鉱物って事なんだろうけど・・・とにかく、暇だ。

「はあ――――――」

銅貨を渡した商人が出て行ったのを確認して長く大きなため息を

吐ぐ。今ギルドには職員しか居ない。

「仕事しろよ、リキット」

すぐさま、このギルドで唯一の相棒が皮肉った。

唯一の相棒と言つても、僕に友達が少ないわけじゃなく、ただ単にリザリア東、ギルドには、僕と相棒のレー^デしか職員が居ないだけだ。決して、友達が少ないわけじゃない。

「仕事つて言つても、今みたいに情報代渡すか、キュー^ブのお金を銀行に持つてくくらいしか、することないじゃん」

顔を膨らませながら両肘をカウンターにつく。

「ははは・・・まあ、確かにな」

苦笑いしながら、管理用キュー^ブに先程の商人の情報代の受け渡しについて入力するレー^デ。

管理用キュー^ブというのは、仕事の登録や顧客・ギルドメンバーの照会、報酬の受け渡し状況なんかを閲覧入力するためのキュー^ブで黄色い魔法立方体がついてるので、僕たちは単に黄色とか、黄キュー^ブとか呼んでいる。僕たちのような末端の職員用のキュー^ブだ。逆に、客用のキュー^ブは青いので、青キュー^ブと言つ。

「ん・・・やつぱり、商人じゃなくてハンターだつたか」

入力をしていたレー^デが、黄色の管理キュー^ブを見ながら言つた。

商人とかハンターというのは、ギルドメンバー、つまりギルドに登録した斡旋を受ける人の、系統の事で

、斡旋を受ける際に重要な要素の一つ。外では、自分はハンターだとか、商人ギルド所属だとか、言うみたいだけど、実際にはギルド組織は一つで、それぞれギルドが認定した系統の、許可されたランクまでの仕事しか斡旋されない。だけで、系統^{クラフトマン}ごとに商人ギルド、ハンターギルド、学者ギルド、技巧士ギルド・・・なんていう風にギルドの建物が立ち並んでいたりはしない。

「別に珍しくも面白くもないよ」

格別リザリアでは人目を引き付ける為の商人の格好の方が、修道士や冒険者を装うより、よほど目立たないため、そうしている人も

いる。

仮にハンター系統のギルドメンバーだったとしても、情報の売買のためだけに最低のハンターランクを得て、クエストを受けず商いをしている人も多い。商人系統のライセンスには所在地が必要で、旅商売をしている人はハンターのライセンスを得ているのだろう。

ちなみにクエストというのは、ギルドが受けて紹介する仕事の呼称で、設立当初、ギルドがエクセリア王国立地図製作委員会と呼ばれていた頃。オルフィード大陸の地図製作のついでに未開地の開拓余地を測つたり、魔窟への進入といった探索を主とする作業を一般から募集していた事を起源としている。ハンターと言つのもこの頃の名残だ。

当初、地図の製作は数世紀はかかると推測されていたらしいが、今ほど発達していなかつた魔法通信を使用した製作は、あまり正確ではないにしろ、通常の使用に問題の無い程度の地図を、たつたの五年で完成させた。正確な測量による大陸図の製作は、ギルド設立から半世紀経つた今でも専門チームによつて続けられている。

もつとも、仕事の引き受けと紹介が十分な事業になるという商機が大きかつたことから、クエストの引き受けと紹介を事業として独立させる結果となつた。名を新たにギルドとした上、本懐であつた地図製作を国から引き継ぐ事で準公的機関という立場を確立した。更にエクセリア王国とは別に、魔法通信の研究開発に非常に力を入れ、独自の通信システムを瞬く間に作り上げた。半世紀前には、術者同士の思念会話のようなものを魔法通信と呼んでいたが、今では、魔力を原動力としたデータ通信の事をいう。革命といつて差し支えないほどの変化と言える。当然各国、ギルドの魔法通信システムを導入している。

ギルドが準公的機関という立場とネットワークを柔軟に利用して、他の追随を許さないほど巨大な組織に急成長したのは事実だ。だからこそ僕は、ギルド職員になつたことをステータスだと確信できる。

しばらく、沈黙が続いたので田を閉じていると。

「ああ・・・また止まつた」

そう、4日ほど前から黄キューブが止まつて反応しなくなるのだ。といつても10分ほど置けば、また普通に動くようになるので、暇なギルドには大した影響は無かつた。でも一応、メンテナンスを要請している。ギルドの特殊技術だから、開発部だか技術部から専門員がやってくるのに結構時間がかかる上、青キューブや魔法通信には異常が無いために、後回しにされてるのかも知れない。

「また？暇なのに、更に・・・暇にいなつた～」

わざと最後ゆっくりと伸ばして言つ。黄色キューブは暇な時、クエストやギルドメンバーの情報を閲覧するという、大事な暇つぶしに使えるのだった。まあ、良識ある使い方ではないよね。

「リキッド・・・お前、だらけ過ぎだぞ」

怒気も無く、先輩風を吹かされる。まあ、確かに1つ年上で、10ヶ月先輩だけど。

「とは言つても仕事が無いし」

それでもレー^デに対して敬語を使わるのは、僕が礼節を重んじないからじゃなく、ギルド職員になる前からの知り合いだからだ。

エクセリアでは幼少時、少年時の教育を経て社会へ出るのが普通だけど、僕の家は割と裕福で、更に上の教育を受けられた。そうして入った学院、エクセリア王国立経済学院で知り合つた。レー^デは1年留年していく、最初はそうとは知らなかつたから、そのままズルズルと敬語を使わず話していた。レー^デも口調を気にしない気さくな性格で、年上と知つた後で改めて敬語を使ってたら、逆に皮肉の一つでも言われていただろう。

学院を卒業した後、僕は更に上の経済研究学院に入つて、一生安泰と言われるギルド職員になつたという訳。

一方、レー^デは学院卒業後、研究学院に入る金もないし商隊に入

つて世界を見て回ると書いて、僕とは違う道を進んだ。

結果的に、同じギルドの2人しか常駐しない、僕の初めての職場である、ヒーリザリア東ギルドで再会する事になったのだから、世間は狭いと思えててしまう。

「そういうえば、お前エリートコースだつて？」

妬みも羨ましさも感じない世間話のよつたな口調で尋ねてくれるデータ。

「…まあ？」

ギルド内を見回した後、両手を軽く上げ答える。

「はははっ、本当にわからなくなるな」

「他人事だと思って」

愉快そうに笑うデータを余所目に、両手を頬に付け目を閉じる。今度は口をへの字に曲げて。

本当は、2年の間に複数のギルドに赴任した後、試験があつてそれに合格すれば晴れてエリートコース確定なんだけど、こういう仕事の少ないギルドに配属されると、暗に試験勉強しろと言われているようで、やる気が起きない。

それでも、嫌味な上司や性格の悪い同僚のいる配属先で仕事に忙殺されることを考えれば、旧知の友人と仕事の少ない配属先というのは、比べるべくも無く、良環境であるのは間違いない。むしろ、かなりの優待遇なんじゃないかと思う。

そんなことを考えていると、来客を知らせるドアベルがカラカラと鳴った。

いつものように一瞥し、軽くお辞儀をしようとしたが、出来なかつた。明らかにこの街の雰囲気とそぐわないその少年の姿が、何気ない一連の仕草を躊躇させてしまったのだ。

軍製品のような機能重視でどこか重苦しい印象を与える、黒を基調とした制服のような服装は、袖口から先が千切れで無くなつてお

り、泥の乾いた後もある。ほとんど黒一色なのにやたら汚れを感じさせるほどボロボロの状態だった。その服装とは対照的に顔立ちは幼さを残しながらも整つており、何より白い肌に、燃える様に天に向かつて伸びる赤い髪が印象的で何かの美術作品かと思わせた。年の頃は15くらいだろうか。

その綺麗な印象を与える汚らしい少年は、こなれたように青キューブを操作し始める。そのいつも通りの光景に自分が飲まれていた事に気が付く。同時に、少年が地に着きそうなほど大きな剣を帶剣している事にも気付いた。完全に雰囲気に飲まれていたらしい。ニニリザリアでは滅多にお目にかかれないだろうが、遺跡や魔窟に程近いギルドならばよくある光景なのではないかななどと、勝手なイメージをして現実に戻った僕は、レーデの方を見やる。

レーデもまた僕の方へ向きなおそうとしていた。お互いの視線がぶつかる。レーデの顔が呆けていた様に感じた。

それがひどく滑稽思えて、思わず吹き出しそうになり、慌てて両手で口を押さえた。

レーデはレーデで僕の行動が可笑しかったのかクスクスクと笑い始める。

にやけた顔をさせたままレーデが、いつの間にか直っていた黄キューブで閲覧者の情報をすぐさま表示させる。僕もそれを見ようと横から覗くと、表示された情報に、一際興味をそそられるものがあった。

ハンターランクCとあった。ランクは資格系統にもよつて3~6種類あるが、ハンター資格のランクは最高Aから最低Fまでの6種類あって、全系統の中でランク数が一番多い。というのも、ハンターの仕事というのが、他の系統に当てはまらない仕事・・・つまり、何でも屋のような仕事が多いから。単純に仕事の数も、登録者の数も最も多い。最低のFランクは正直、誰でもなれる。報酬こそ少ないが、主婦だろうが浮浪者だろうが、誰でもやれるような仕事だ。従つて、商人ライセンスを得られない人もハンターライセンスを得

て情報売買したりする。それ故に一番多いのがFランクハンターだ。逆にEランクからが本当のハンターとも言える。

もつともEランクとDランクは同格というのがギルドの見解だ。Eランクは知識を、Dランクは体力を必要とする要素が大きい仕事と、性質の違いで仕事を分けているだけだったりするのだが。

とにかくハンターは、何でも屋な性質上、上位のランクを得るためにには、知識量・戦闘力・判断力・順応力とあらゆる能力を要求され、どうしてもクエストをこなすまでの総合力が必要とされる。

そして、この少年は既にCランクハンターだつて事。Cランクともなると、要人とまでいかなまでも旅の護衛や、規模にもよるが賊退治なんていう、実力者向けの危険クエストも含まれるランクだ。こんな子どもがとも邪推がよぎってしまうが、汚れきった服装もクエストの勲章かのように、見る目が変わってしまう。というのもCランクハンターなら選り好みさえしなければ、クエストの報酬だけで暮らしていけるレベル。プロのハンターつて事だ。

ひとしきり青キュー^ブを眺めていた少年は、そもそもなさそうな顔を一瞬浮かべ、思案する素振りをみせる。どうやら気に入るクエストが無かつた様だ。それはそうだろう、リザリアのCランクのハンタークエストはここ一週間で、急ぎの行商護衛クエストと国境付近イーリア国内の山賊討伐クエストの2件。どちらもクエスト進行中で、残ったクエストも数少なく、誰もやりたがらない様な内容か、怪しさが伺えるようなクエストだったと思う。

他ではどうか知らないけど、基本的に、リザリアは行商が休息に立ち寄る場所で、行商途中の商隊ばかり。リザリア発の商隊も計画的に護衛を雇うならば、定期間雇う相手をギルドを介さず決めている事だろう。ギルドに制約を受けないように、手数料を払わないようにするつてのは一理ある。

ギルドのクエストでは、登録メンバーの管理とランク分けもあり、

ハンターが裏切つたり、能力を詐称されたから積荷を守れなかつたつてのは、まずあり得ない。逆を言えば、ギルドへの手数料は、安心を買うと考えれば高くは無い。その代わり、手数料と報酬は必ず前金で全額だ。この制約が無いと依頼者は別の者を雇つてしまつたり報酬を踏み倒すというトラブルが必ず起る。従つて、全額前金制度は絶対に必要だ。もちろん、クエストを受ける者、ソルバーが決まらなかつた場合は、手数料の一部以外を返金する。ギルドでは、問題を解決する者の意を込めて、クエストを受ける人をソルバーと呼んでいる。

そんな訳で、行商をする者でもギルドを利用しない人もいる。中には、護衛を全く雇わずに賊に遭わない事に賭ける商魂逞しいツワモノも多いと聞く。それがあるから、賊もなかなか減らないのだと思う。奪われた事への報復に討伐依頼をするくらいなら、最初から奪われないようになにか手を貸して貰うのが、現在遂行中であろう討伐クエストの事をふと考へる。

少年が面倒臭そうに立ち上がり僕たちの居る方へ近寄る。

「クエストを受ける」

ただそれだけをカウンター越しに言つ。随分と無愛想な子供だと思うが、ソルバー無しにクエストは達成しないから、代金を払う依頼者と同等と考え、解決者と依頼者を巧く取り持つのが僕たちの仕事。つてことで、営業スマイルで応対する。

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

言つて黄キューブを操作して、少年が登録したクエストを照会する。

「・・・こちらのクエストでよろしいですか？」

黄キューブの反対面にクエスト情報を表示させて、事務的な確認をするが、それとは別に本当にこのクエストでいいのかという疑問の意味を込めて語尾が強まる。

そのクエストには覚えがあつた。事件というほどの事はなく、そ

ういう事もあるのだと、働き始めたばかりの僕が憶えるには十分のトラブルがあつたクエストだ。一見、ただのアイテム收拾クエストなのだけど、失敗報酬が0%のクエストなのだ。

失敗報酬とはその名の示すとおり、クエストを失敗した時のソルバーへの報酬で、クエストの内容で分類されるギルド規定以上であれば、何%にでも設定できる。アイテム收拾はその中でもクエストの成否がハッキリとした形で判断できるため、ギルド規定に則つて失敗報酬を0%を設定できる。

まあ、失敗報酬は誰でも規定の丁度で設定するのだから、そこは問題じゃない。問題になつたのは、ギルドで受け渡しを行う前に盜難にあつた事だ。その時のソルバーは、依頼人が盗んだ犯人だと主張したが、ギルドとしてはアイテムを持つて来れなかつた以上は失敗とする他は無かつた。

その時、新人なりにも精一杯対応したのだけど、怒鳴られながら詰め寄られた記憶は、今思い返してもイライラしてくる。しかし、それ一回きりではなく以前にも同じことがあつたと、今はギルド本部勤務の先輩に教えてもらつた。どう考へても、依頼品を盗まれるのが悪いのだけど、問題の潜伏しているクエストであることには間違ひない。

「ああ」

その生返事に、このクエストでなければ感じなかつただろう、不快感というか苛立ちを覚えつつ、忠告をする事にした。

「こちらの”薬素材收拾”クエストなんですが、素材アイテムが盜難に遭つたり、狙われる事がありますので、お気をつけください」

「・・・」

無視。

「あ、あの。聞いてますか？このクエストの素材アイテムは」

「だから何だ？盗まれる奴が間抜けなだけだろう・・・」

つい、その通り！と口を滑らせそうになりつつ、少し気分がよくなつた気がした。

「早くしてくれないか？」

「すみません、では、登録しましたので、アイテム收拾頑張つてください」

「・・・」

青キューブで、クエストの受諾と情報を確認すると、やはり無言で出て行ってしまう。本当に無愛想だ。

レーデが少年を田で追いながら、呆けているように見えた。

「どうかしたの、レーデ？」

「いや、なんでもない・・・あんな子どもが儀式場跡地に行くんだから、世も末だと思ってな」

リザリアから南に程近い場所に、邪教集団が何かの儀式に使つていたらしい廃墟がある。そこは負のマナが漂つているらしく、普通ではお目にかかれないモンスターと植物の巣となっていた。その中に薬の素材となる植物が生息している。

「でもあの子もJランクハンターなんだし、大丈夫でしょ」

「・・・そうだな、それでもモンスターが怖いって思つんじゃないのか?つてな」

「そりか?さつきの子供の場合、モンスター相手に眼を付けてそうだけど」

「・・・だといいんだが」

切れの悪い物言いに何だか心配になつてくる。

「レーデって子供好きだった?」

「ん?どうかな・・・嫌いではなかつたが」

「子供が欲しいなら、まず彼女を作らないと!大雑把でがさつなレーデには、細かいところに気の利く娘がいいと思うよ」

「・・・お前!セビうなんだ、彼女作る気ないのか?」

「あ、あるよ」

自分で振つておいてなんだけど、この話題はダメだ。誰の得にもならない。

「お前は頼りなさそうなところがあるから、引っ張つていってくれる姐御肌な人がいいと思うぞ」

「う、うん」

痛いところを突かれ、たじたじと返事をしながら、レー^ゲに笑顔が戻つていくのが感じられたので、今日のところは良しとしよう。

ママな仕事（後書き）

お詫び行為です。すみませんでした。全て反省しております。

ソフトな仕事（前書き）

「」の作品は、読みにくさをMAXに設定しております。

性的な描[写]やいわゆるH・口描[写]、萌えみたいな描[写]はござりません、
「メテイタツチの笑える描[写]、愉快で痛快な描[写]はござりません、
”戻る”か”閉じる”ボタンを計画的に”利用ください。

今日は朝からクエスト品の配達をしている。依頼人の希望で運搬を委託することはあるけど、本来、品物の運搬はギルドの仕事じゃない。それでも、配達をするのは依頼人が、この街の、エクセリア東部地域の権力者で遠い親戚にあたるため。それも、直接配達を頼まれるものだから断れる訳がない。

技巧士のソルバーによる銀製の壁掛け細工を渡し、ひとしきり細工について語つた後、世間話に突入する。かれこれ、2時間は経過していた。まあ、話そのものもなかなか面白いもので、消閑の訪問といえば、それらしくもある。

「そういえば、今日の夕刻には嵐になるという事だ、十分気をつけたまえよ」

とある政治家の裏話も山場を終え、僕がお茶の3杯目を飲み干しかけた辺り、依頼人がすっと立ち上がり窓の外を眺めながら言う。この人は話はメリハリも効いてて、切り上げるタイミングも心得ているようで、スッキリと話を聞ける。僕でなくとも見習いたいと思わせるだろう。

「リキット君、次の配達もお願いするよ

「はい、またお話を聞かせてください」

そうして別れると、空を見上げる。東の空には重く暗い雲が広がつており、天気が荒れる事を予告しているようだった。離れてやや南の空には、白く薄い雲が架かっているものの、燐々と街を照らしている太陽が頭上に昇ろつとしていた。

もうお昼、ほどよくお腹の虫が鳴いたような気がした。レーデには悪いけど、先に昼食を済ませて戻ろつ。

リザリアを南北に分断する、東門から西門まで真っ直ぐ伸びるを大通りまで出ると、段違いに騒がしくなる。人通りはもちろん馬車

の往来や、露店商が至る所に日除け天幕を垂らしていて、見た目にも喧騒を感じることが出来る。

東門へ近づくと喧騒も薄まり、いつの間にか反対側から歩いてくる赤髪のシリエットを見つける。昨日の少年だとすぐにわかつたが、先に東ギルドへと入つていった。それを追うような形で僕もギルドへ到着する。

木製であつて重厚感を漂わせる扉を開けると、予想していた通り、少年がカウンター前で何か訴えているようだ。クエスト失敗かと思いきや、カウンター奥に見慣れない男女3名と一人掛けのソファほど場所を取る大きな器具や床にも小さな工具が所狭しと並べられたのを目にして、それとは違つことが伺えた。

「リキット！ ちょうどいい所に戻つてきた」

言つや否や駆け寄つてくるレーーテの話によると、僕が配達に出ていった後、黄キューブのメンテナンスにカウンター奥の3人がやってきて、キューブの状態を検査してたけど、原因らしい原因が見つからないので、本格的な調査と代替え用のキューブを設置しようと、キューブとマナを切斷したところに少年が来たので、マナの接続を待つか別のギルドに行くようにと説明していたとの事。

実際にタイミングの悪い話だ。僕が知る限り青キューブの増設した時の事だけど、マナの接続はそれでも10分かそれくらいの短い間だつたと記憶している。

「すぐ終わるなら、待つてもらえばいいじゃない？」

「それが、何かが良くないらしくて、かれこれ1時間切断したままなんだ・・・」

どういうわけか接続出来ないでいて、黄キューブが使えないって事は、青キューブで情報の閲覧する以外の事は全然何もやれないって事。つまり、少年はいつ終わるとも知れない接続を待つか、別のギルドへ行くかの話をされていた訳で、僕が丁度良く来たということは。

「・・・なるほどね、じゃあ、案内してくるよ

「頼む！」

東ギルドと同じよう、西門近く大通りに面したりザリア西ギルドなら案内する必要もないんだけど、近い方の中央ギルドは入り組んだ場所にあった。別に、わざと分かりにくい所に建設したんじゃなく、都市機能や要所が変わる毎に、奥まつていつただけだ。その証拠に、中央ギルドはいい感じに古臭さを漂わせる酒場のよつな内装に、石造りの建物自体も結構ボロかった。

そんなどうでもいい話を差し込みながら、少年を案内する。・・・はずが、少年の足が異様に速く、僕はかるうじて歩いていると言ふ様な早足を強いられ、少年の後ろを付いていくという、なんとも情けない状況で、普段運動することの少ない僕に、話をしながらなんて余裕などあるはずも無く。

「は・・・はあ・・・ちょ、ちょっと待つて・・・

無言で振り返る少年。

「君、足速いねえ・・・

「ああ、追つてくる奴がいるんで、つい。な

田を細めて、面倒臭そうに答える。

「えっと、僕は案内をしようとしてるだけなんだけど・・・

「お前じゃなくて、後ろのフードのガキだ」

言われて、くるりと振り返る。人ごみでハツキリとは見えなかつたが、確かに離れた所で小さなフード姿が露店の影に入つていくようみえた。赤髪の少年より小さかつた気がする。

「この植物を盗もうとしてるんだろ」

どうして?と質問する前にあつさりとした回答が返つてくる。確かに僕はクエストアイテムの薬素材が盗難に遭う恐れがあると言つたけど、あまりに安直な思考というか、自意識過剰というか。だってそうでしょ、たまたまフードを被つた子供が後ろを歩いていただけかもしれない。むしろ、それ以外を考える要素が全く無いのだから

「気のせいだよ」

「・・・さつさと案内しろ」

無愛想なだけじゃなく、態度も言葉遣いも悪い。それ以上に、年上を敬うこと教えられなかつたのかと疑問に思つ。早く案内し終えて戻る。イライラする。

「じゃあ、このまま真っ直ぐ行つて3つ目の角を右へ、その後にあら二叉路を左へ・・・」

言いつつ、歩き出した僕の後ろをゆつくりと付いてくる少年。なんだ、意外と素直なところがあるじゃないか。

僕が歩くペースが遅いと感じるのか、この街が珍しいのか、時折り立ち止まつては、首を回して色々なところをキヨロキヨロと見回す赤髪の少年の姿を目にすると、鶏が鶏冠トサカを振つているよつで、少し愛らしくさえある。

そんな感じで進んでいるので、息切れのため中止していただけでもいい説明を語つていた。少年は全く聞いている様子は無かつたけど、この調子で無言のまま進むのは逆に息が詰まりそうだったからだ。

話も終わつて、入り組んだ路地を奥へ奥へと進んでいくと人気が感じられなくなつていつた。随分と寂しくなつてきた。中央ギルドももう近いし、これといって話す事もないだろつと、静かに案内を続ける。

この道が一番近かつたんだけど、この街に初めて訪れただろつ少年には、大通りをなるべく使う道を通るべきだつたかなと、今更ながらに後悔していつた。まあ、少年の態度の悪さが招いたことだと勝手な理屈をこねつつ、案内した後に大通りへの出かただけ教えればいいかななどと算段をつける。

「もうすぐ中央ギルドに着うわー！」

「ヒイイイイイーンー！」

真横に突然、馬が出現した。

正確には小さな十字路、建物が死角になつていて、脇に停められていた馬が、急に現れたように感じたのだけど、そんな事は僕の驚き加減には関係ない。

僕は馬の反対側後方へそのまま後ずさる、というか、口ケる。そのままお約束のように少年にぶつかつ・・・たりはせず、そのまま地面に尻餅をつく結果となる。

恥ずかしい。正直、恥ずかしい。が、ここは敢て笑顔で「は〜ビックリした〜！」

「・・・」

無視。

やつぱり、そうきますか、恥ずかしさ倍増です。

少年は特に笑うでもなく、馬鹿にするでもなく、ただ僕に手を差し伸べていた。といつても、少年は馬の方を見ていて、暴れないよう片手で押さえていて、ついで程度に僕の方に手が伸ばされていただけなのだけど。

恥ずかしさは消えないものの、このまま尻で歩いていくわけにもいかないので、差し伸べられた手を握ろうと手を出した、瞬間。

フードを被つた子供が少年の後ろを走り抜ける。ちょうど日線の高さが腰辺りだつたせいか、少年の腰に軽く巻かれた布袋を、フードの子供が引き抜いて持つて行つてしまつたのが見えた。布袋を盗まれたのだ。

「・・・泥棒！」

「・・・ふう」

赤髪の少年はため息をつくや否や、脱兎の如く駆け出していた。

小さなフード姿は追いつかれまいと、速度もそのままに角を曲がつていつてしまつた。少年も逃すまいと凄いスピードで角を曲がる。僕も慌てて立ち上がり、二人を追う。

少年たちを見失つた十字路に差し掛かると途中、ガシャーンと何かぶつかる音が聞こえ、二つ目の曲がり角に出ると曲がつた先に、

フードを被つたままの掴み上げられた子供と、左手を子供の胸元に突き出した少年、そして窓から顔を出す野次馬を見つけた。そのまま駆け寄り少年に声を掛ける。

「はあ・・・はあ・・・取り返したの?」

「布袋ならそこに転がっている」

「ふう・・・中にクエストアイテムが・・・?」

「いや」

布袋は膨らみを持たず、紙切れのように地面に落ちていた。今度は、子供の方に向いて。

「えっと、君。盗った物はどこへやったのかな?」

「・・・それが全部」

「全部つて、薬素材が入つてないじゃない」

「・・・知らない」

「君ね、嘘はよくないよ」

「こいつは嘘は吐いていない。最初から布袋には何も入つていない」
「つまり、何も入つてない布袋を盗まれて、それを盗り返すためにここまで走つたって事?」

「少し違うが、まあ、そうだ」

「どうして何も入つてないの?空だつたとしても追つより中央ギルドに急げば良かつたんじや?それに、狙われてるつてどうして知つたのさ?」

「質問の多い奴・・・黙れ、説明する」

「第一に俺は、夜明け南の廃墟を出てすぐコイツがつけて来ていたのに気付いていた。次に、そんな事をするコイツに聞きたい事があつた。だから、布袋を空にしてそのまま腰につけていた。わかつたか?」

で、布袋を囮に子供を捕まえたと・・・そういう事はもつと早くに教えてくれてもいいんじゃないかと思うんだ、お兄さんは・・・つと精神的にだんだん圧倒されてきた気がする。

窓から顔を出していった野次馬以外にも人が集まり出し、周りが騒がしくなってきていた。

「誰に盗むように頼まれた？」

そんなことお構い無しに詰問が始まった。ギルド職員が子供に暴行しているように見えるこの状況は、僕にとっては大問題だ。

「ここじゃ何だし、とりあえず、中央ギルドに場所を移そう」周りを見渡すよう顎を出して促す。

「答える」

続けられる尋問。相当まずいかもしれない。もしかしたら、放つて置いて戻った方がいいかもしない。

「ほ、ほら、エクセリア軍が来るかもしないし」

「・・・」

流石に思案に至ったようで、一度ゆっくりと瞳を閉じ、開けて、子供の腕を掴み引っ張り歩き出す。

「行くぞ」

助かったと思いつつ見ると、相当な力を込めて掴んでいるのだろう、子供は痛そうな顔をしながらそれでも声を出さないよう我慢しながら、引きずられるようにして歩いていた。可哀想としか思えなが、状況が状況だけに、何も言えずに先頭に立つ。本当にすぐそこだからと、早足で案内する。

中央ギルドに着くと、自分が東ギルドの職員であることと、キューブ故障によりソルバーを案内している最中に盗難に遭つて、犯人を捕まえた事だけを伝えて、とりあえず、奥の部屋を借りることに成功した。

通報しようか?と尋ねられたが、子供があまりに可哀想だったからか、どうしてかわからないが、とにかく申し出を断つた。

それでもかなり異様な状況であることに変わりは無い。尋問が再び始まるうとしていたが、僕はこの子供の言葉を一言しか聞いてい

ないのを思い出し、もしかしたら何も言わないんじゃないかなと、少年に耳打ちをしたのだけど。少年は、だるうな。と、さも当たり前に返すので、再び幼児虐待が始まらないように、僕から別の角度からアプローチすることにした。幸い、話は出来るようだから。しかしながら僕がこんな目にと思わずにはいられない。

子供は椅子に座っている。その対面の椅子に僕も腰を落として、質問を始める。

「君、名前はなんていうのかな？」

「・・・カラス」

「えーっとカラス君？ 偽名かな？」

「・・・違う」

まあ、いいけど。呼ぶ名があれば、とりあえずはそれでいいと思つた。

今まで案内したらそれきりと考え、少年の名前を未だに聞いていなかつたため、後ろに立っている少年にも尋ねる。

「そういえば、君の名前聞いてなかつたね？」

「デュライだ」

「OK。カラス君、彼はデュライ。僕はリキッドって言つんだよろしくね」

「・・・」

この部屋の空気は、外の10倍は重いと思った。

「ん~、カラス君の顔が良く見えないし、この部屋ちょっと暑いから、そのフード取つてもらえないかな？」

フードというよりは、ボロ切れを被つただけのようだが、そのボロ切れは大きく子供の全身をスッポリ覆い隠していた。それを頭の部分を両手で掴み引っ張り上げる様にして、脱ぎ去ると、これまたボロ切れで出来たような元の色がよく分からぬ半ズボンと半袖のような物をまとつていた。髪型はボサボサの何箇所か変な束が出来てはいるが、一応切つてはいる様で、短く、薄い茶色をしていた。顔は痩せこけていて骸骨の様とまでは感じないが、子供とは思えな

い喪退感だ。

ちなみに、僕の服装はギルドの制服で白を基調としたローブの上に、黄色のケープ型飾りをつけたもので、青のラインが入っている。所属や地域なんかで色や作りに差があるが、基本的にギルド職員の制服はローブだ。髪型は前髪が短めに左右中の三方向へ流し分け、後ろはミディアムの長さで癖によつて軽く波打つてゐる感じで、明るいとも暗いとも言えない中間的な茶色。顔は悪くないと思つてゐる。デュライは昨日と全く同じで汚れた黒い服装、天に向かつて伸びる赤髪と、整つた顔に白い肌。夜明けに廃墟を出たという言葉からも、昨日そのまま儀式場跡地へ向かつて、昼頃に街に戻つたと推察できる。という事は寝てないのか、この人。

「いいね！そのケープ無いほうがカッコいいよ」

「・・・ん」

「カラスはどうしてデュライの布袋を取つていつたのかな？」

「・・・売る」

「取つた布袋はどこに持つて行くつもりだつたのかな？」

「・・・金くれる人」

「お金くれる人はどこにいるかな？」

「・・・」

「ん~じゃあ、お金くれる人はデュライの事を知つてゐる？」

「・・・」

「じゃあ、布袋に何が入つてると思つてたの？」

「・・・知らない」

「カラスがデュライの持ち物を狙つたのはどうして？」

「・・・コイツが金になるもの持つてゐるつて教えてもらつた」

どうも、答えてくれる質問とそうでない質問があるようで、まだはつきりとは言えないが、この子は嘘を吐かなさそうだということ、ある程度口封じをされているんじゃないかということが考えら

れそうだ。クエスト品を売る相手について聞くと答えないのではないか、などと考えているとデュライが割って入つてくる。

「お前がアイテム売る相手と、俺の事を教えた奴は同一人物か？」確かに、カラスの返答に含まれる情報が少ないせいか、取引相手と狙わせた者を結びつけるような事は何も言つていらない。僕も先入観から同一人物と思い込みそうになつていたところだ。

「・・・」しかし、カラスはデュライを強く睨むだけで答えを返そつとはしなかつた。

「随分嫌われたな」

それはそうだろう、カラスの右腕には掴まれた後が真つ赤になつてまだ残つている。下手したら後が残るんじゃないだろうか。とは言え、その質問には一理あるので聞いておきたい所だろう。

「コイツには教えないから、僕にだけ同じ人だつたかどうか教えて欲しいな」

「・・・違う、別の人」

椅子から降り、僕のそばまで来ると口に両手を添えて、小さな声でそう応えた。

「そつか」

子供は僕に心を開いてくれてるのか、そうでなく単純に根が素直なだけなのか、今までのところ悪印象を受けなかつた。

「このガキ、どうするんだ？」

デュライは答えが早く知りたいのであるうか、話をカラスの処遇のことへと移す。

正直、通報することを断つたもののカラスのこの後については、何も考えてはいなかつた。例えば、無罪放免としたとして、カラスにとつて何が変わるだろう、そのまま戻れば、いずれ蛾死しそうだからといって、軍に引き渡す事が正しいとも思えない。軍が嫌いな訳でも、信用してない訳でもない。むしろ、好印象すら持つてゐる。それでも、子供を組織に委ねてそれでお終いというのは、間違

つている気がする。

「じゃあ、僕に何が出来るのか。考へても何も浮かばない。

「よし、乗りかかった船だ。僕の家に来るかい？カラス」
「僕がこんなにお節介焼きな人だつたとは知らなかつた。

「・・・ん？」

「三食昼寝付きの家事手伝いのクエストかな。もつとも、ご飯以外に報酬は出せないんだけどね」

「・・・ご飯食べる？」

「もちろん。ただし、これはクエストだから、ちゃんと働いてもらうけどね」

「・・・クエスト？それ、する」

「我ながら、なんて面倒なことをと思ったが、クエストを知らないというカラスの発言に、もしかしたら想像以上に、面倒を見なくても済むかも知れないと、淡い期待を抱くのだった。

カラスが僕にくつついて離れないので、体面的にデュライは耳打ちされた答えをハッキリと聞けずじまいにいたけれど、僕も猛烈な視線を受け続ける気はないので、中央ギルドの方々に説明を終えると、すでに報酬を受け取つていたデュライと合流し、中央ギルドを出た後、デュライにだけ分かる様に切り出す。

「デュライ、今回のクエストは、あの商人が目的の情報を持つていなくて、大変だつたでしょ？」

「・・・ああ」

これで間違いなく伝わつたはず。

それ以降は特に話す事も無く、大通りへと差し掛かり左へ、東ギルドの方へ向かおうとする。するとカラスにロープの裾を引っ張られる。カラスの方を見ると右を振り向き、それに促されるように、カラスの視線の先を見やると、デュライがツカツカと歩いていつるではないか。

まあ、親しくも無ければ、今後何かしらのお付き合いがあるわけ

でも無いけど、カラスに教えられなければ、誘拐かと心配する要素もあるでしょう。いや、無いにしても、じゃあこれで位の挨拶はあつて然るべきだと思うんです。

「デュライをようならー。」

苛立ちと諦めとちよつとした安堵とが、ない交ぜになつた声で別れを告げた。少年が振り返ることは無かつたが、ただ一度、腰に吊るした剣の柄に手を当てた。

デュライと別れ、東ギルドへ向かう間にカラスの生い立ちというか、過去について聞いてみたのだけど、物心ついた時にはもう、浮浪生活をしていたという事だつた。唯一、名前を付けた人物がストリートチルドレングループのリーダー的存在だつた子に名付けられたらしい。そのグループは数名で、生死を別にして全員居なくなつてしまつたという。

リザリアは発達した街で、普通に暮らしている分にはストリートチルドレンは見かけたりしない、そのように浮浪児というのが少ないとは言つても、繁華街の大きさから望まれない子供が産まれるという事があるのだろう。娼婦がその子供を捨ててしまえば、カラスのような子が必然にうまれる。

今まで見ようともしてこなかつた世界の話だ。いまやらひに心が痛む。

空は、そんな僕の心を表すように重く暗い雲が広がり始めていた。

休業中、他のギルドへお回り下さい。と手書きの紙切れの貼つてある東ギルドの扉を開けると、いつもの声が僕を迎えてくれる。

「遅いぞリキット、何やつてたんだ？」

「「めん、色々あつて」

カラスを連れて入ると、当然の質問が飛んでくるので、謝るのもそこそこござつくりと事情を説明する。

「それでこの子を引き取るって言うのか、お前が？」

「うん、軍に引き渡すのは何か違うと思うんだ。それに、Fランクハンタークエストである程度稼げるようになるまでの間だけだから

「本気……なんだな？」

「うん」

「……わかった、俺に出来ることなら協力する」

レーデのそういう所、好きだよ。と言いたら、気持ち悪い」と言うな。と一笑されてしまったが、本当にそう思し、助かる。

「協力するにはするんだが……」

口を濁らせながら悲報を告げ出すレーデ。

「扉の張り紙見ただろ？……持ってきた代替キュークが故障してるとか、マナに接続されても全く反応しないんだ。……ってことで、完全に修理が終わるまでの間、この東ギルドは休業にして、リキッドは西ギルドへ、俺は中央ギルドへ一時的な異動になった」「ええーー！」

カウンター奥を見れば、修理をしている職員の一人と目が合い、すまなさそうに頭を下げられた。レーデの言葉を疑うわけではないが、本当らしい。正直、西ギルドとか遠つ！…としか思わなかつた。実際、東西のギルドが東西の門の近くに建てられていて、東ギルド近くに住まいを借りている僕は、ほぼ街を横断する事になる。遅い僕の足で大体1時間かかるかどうか位の距離だ。よし、馬を借りよう。

決まつてしまつた事は仕方が無い。馬を借りることを含めて明日は休もう。と心に誓つのであつた。

「一応言つておくが、明日は休んでいいからな……修理は原因究明を含めて1週間以上かかるらしいから、西側で部屋を借りるのも有りだ。今日はもう帰つていいぞ、後の段取りとかは俺がやつておくから

僕の考えが見透かされたようで、ついで、欲しい情報ももたらされる。

「了解であります！」

しんどい時のハイテンションで応え。今日はすでに疲れ果てていたので、その言葉に甘えることにする。とはいって、子連れで部屋を探すことや仕事中にカラスをどうするかを考えなければいけない。その辺の事は明日に回すとしても、とにかく今日はもう帰ろう。

カラスは大人しく黙つたまま修理作業を見ている。といつても、今のところ大人しく寡黙な様子しかみたことが無い。真剣に見ていいそれは、修理作業というよりも、解体作業だった。やたら分解しているので、面白く映るのだろう。僕も興味は有るが、それ以上にもう寝たいという気持ちの方が圧倒的に大きい。

「カラス～、行くよ」

日も落ちかけ、色味を帯びてきた美しい西の空と対照に、上空には黒い雲がどんどん屈座り、いつ降り始めてもおかしくない。家に向かう僕の後ろを、ちょこちょこと着いてくるその姿に優しい気持ちになりながらも、どこか不安を抱えていた。

と、空が一瞬輝き、激しい落雷の音の後、途端に激しい雨が降り出した。

「降り出した。」
「ちだカラス、急ぐよ」

家についた頃にはビショ濡れで、カラスに至つては外でシャワーを浴びている様に、もう打たれ放題だった。家といつても、今朝会つた遠い親戚から借りている一軒家で、一人暮らしで使うにはかなり広く、使つてない部屋の方が多い。

雨に打たれビショ濡れである事など、決まっている。どうせ、カラスの髪も体も洗つてやろうとも思つていたし、ちょうどいい、まづは風呂。

この家には、ガスが供給される仕組みがある。設置されたガスのボンベを交換するという供給方法で、風呂と調理場とで火を簡単に

起こす事が出来る。ちょっとした魔法給湯を導入すれば、シャワーも備え付けられるが、僕は風呂に浸かるのが好きなので、特に必要を感じない。ということで、お風呂を沸かしている間、外のシャワーを浴びても風邪を引きそつなので、一度、身体を拭いて着替える事にする。

風呂が沸くまでなので、簡単な服装でいい。と思えど、子供服など持つておらず、タオルを巻くだけでいいかとカラスを呼ぶ。カラスは大人しく素直に言う事を聞くので、とても楽だ。

そして、ボロ雑巾のように汚れた服を脱がし、身体を拭き出すと、色々わかつてくる。

細く骨と皮だけでできるような細い腕には、デコライに掴まれた跡が赤黒くなり始めていた。全身細身で骨と皮だけのようだが、お腹は少し膨らみを帯びていて、餓鬼を連想させる。

餓鬼とは、子供のような背丈で、全身が細く肉付きが感じられないが、お腹だけぽつこりと丸くなつた怪物の事だ。飢餓状態が長く続き、不衛生な物しか食べれないと、餓鬼の姿に似ていくという。もつとも、お腹がちょっと出でているというか、丸みがあるというだけで、子供にすれば当然の姿だ。

それに、はと胸と言うのか、胸も僅かに膨らんでおり、胴体と四肢とのアンバランスさに少し衝撃を受ける。

そして、股間に男の大事な物が・・・無いと。まあ、薄々とは気付いていたんですけどね。確認が出来たってことで良しとしよう。

大まかに身体を拭いた後、タオルを巻きつけピンで留める。僕も同じように雫をポタポタと落とすローブを脱ぎ捨て、身体を拭いて、軽く着込む。まだ、風呂が沸くまで時間もあるので、今の時期には全く必要ないが、暖炉に薪をくべ、火をつける。その後、濡れたカラスの服を洗濯する。そんなことをしていると風呂のお湯がいい湯加減になっていた。

レーデにも言われたことだけど、この先、この子の名前がカラスといふのは、些か問題がある。女の子だとも分かったことだし、余

計カラスというのは無い。本人の意思もあるが、早めに決めた方がいいだろう。綺麗に身体を洗つてやつた後、風呂に浸かりながらぼんやりそんなことを考えていた。この子の髪を洗うと蜂蜜のような綺麗な金髪で、それで連想したのか、幼い時分に初恋の金髪の綺麗な女の子の事を思い出していた。

「ミシェル・・・」

ついその名を声に出していた。

「ねえ、カラスって言う今の名前だと、これから、色々問題があるんだ。・・・君は人間なんだし、違う名前がいいと思うんだ。・・・ミシェルって呼んじゃダメかな?」

「・・・ん」

「ミシェルって名前でいいって事かな?」

「・・・パンサーが付けてくれた名前じやなきやヤダ!」

パンサーというのは、リーダーだった子の事。きっと他の子も動物の名前だったに違いない。

「じゃあ、クロウかな。・・・カラスってのはクロウと言われる動物なんだ」

「クロウ?」

「そう、君はクロウ」

「・・・クロウ!」

どうやら気に入つたらしい。カラスと呼ぶのだけは避けられそうだが、問題はここから。女の子に自分の名前を鳥^{クロウ}と名乗らせるのは居た堪れない。

「そうだなあ、パンサーが付けてくれた名前つてことは、家族の名前でしょ? だつたらファミリー名前つて言つて、普通に名乗る名前とは別の、家族名なんだ。・・・例えば、僕の名前はリキット=インデルミツツつていつて、リキットは僕個人の名前、インデルミツツが家族の名前つていう風に二つあるんだ。」

「・・・それで、君の事をミシェル=クロウと呼びたいんだけど、ダメかな? つてこと」

「・・・クロウ？」

「そう、ミシユル＝クロウ」

「クロウ！クロウ！」

当分の間は慣れないだろうから、フルネームで呼び続けることにしよう。ミシユルと呼んでも無視されそうだし。

風呂の温度も下がってた様で、子供のミシユルでも入浴する事が苦ではなかつたようだ。しかし騙してしまつた後ろめたさと、ファーストネームの方を全く気にしていない悲しさと、一応の体裁を取り繕うことに成功した安堵感、さらには、どうしようもない疲れと眠気が入り混じつて、風呂から上がらずに困られなかつた。

ミシユル＝クロウの身体を拭くと、風呂に入る前と同じように、軽くタオルを巻きつけピンで留める。僕は寝巻きに着替える。

暖炉前に干したローブとボロ布は全く乾いていないが、折角なので、この部屋で、寝ることに決めた。というか、もう寝室まで行けそうに無い。

ミシユルにソファをあてがい寝るように促した後、肘掛け椅子に座りミシユルを眺めて、服も買わないとなどと考へてゐたのに、いつの間にか眠りについていた。

ソトな仕事（後書き）

お詫び行為です。すみませんでした。全く反省しておつまむ。

トロな休日～午前～（前書き）

「」の作品は、読みにくさをMAXに設定しております。

性的な描[写]やいわゆるH口描[写]、萌えみたいな描[写]は「」ません、
「」メテイータツチの笑える描[写]、愉快で痛快な描[写]は「」ません、

”戻る”か”閉じる”ボタンを計画的に「」利用ください。

トロな休日（午前）

「ドサッ！」

その日の朝は衝撃と痛みから始まつた。床に身体を椅子ごと叩きつけられ、その浮遊感の次に来る衝撃で目を覚ます。衝撃に驚くのもそこそこに、椅子の肘掛けの部分と床との間に右手を挟まれ、僕の体重が更に重みを加える。

「ツタア————！」

肘掛け椅子に座つたままだつたのをすぐ思い出すと、すぐさま横倒れの姿勢を、四つん這いの体勢へと文字通り這うよつて身体を起こし数歩歩く。右の甲の辺りが痛み、ジンジンと響く。ビリビリ、強く打ち付けた以外に、間接を捻つたらしい。

「大丈夫？」

僕の叫び声で起きたのか、タオルを巻いた子供が側まで駆け寄つてきて、腰を落としてそう尋ねてくる。カラス・・・じやなくて、ミシールだ。彼女を見て、やっと名前の事や服を買おうと考えていたことを思い出す。

大丈夫かと尋ねられれば、椅子で寝たせいか身体全身が痛い。変な姿勢で寝るとなる痛みが全身を包んでいるようだ。筋肉痛のよつに。と 思いたいが、少なくとも下半身は筋肉痛なんだろう。

そんな事を頭の中で整理していた僕が返事を返さないのでいると、ミシールは正面に回つて顔を覗き込むように四つん這いになると、うやうやしく心配してくれているらしい。

「ちょっと右手を捻っちゃつたみたいだ。でも、大丈夫。・・・心配してくれてありがと、ミシール＝クロウ」

「うん」

フルネームで名前を呼ぶのははわざといしいと思つたが、こうして何度も繰り返し呼ばないと、いつまで経つても慣れないもの・・・多少強引でも、フルネームを呼ぶように意識しているだけと言わな

いとね。

ややして立ち上がり、薬箱を常備していないことに気付く。風邪ぐらいの病気になつても、怪我はしないのが僕の普通だ。でも今は、自分の手の事もあるが、子供は生傷絶えないつてどこかのおばちゃんが言つていたつけ？？？ものはついでと言つが、買い物に行く先が一つ増えたようだ。

グゥルルルルウ

起きたてでお腹の虫が鳴り出すなんて珍しいと思ったが、考えてみれば昨日は夕飯も食べずに倒れるよつに眠つたのだから仕方が無いのかも。

この家にだつて保存食くらいはあるが、朝食にそれを食べて、また保存食を買つてくるなんて邪道、僕はしない。僕は朝食は毎朝焼きたてパンを買い食いする派だ。ということで、まずは着替えだ。流石に、寝巻き姿で恥ずかしい思いをしながらパンを買いに行ける僕でも、タオルを巻いただけの子供を連れては行けない。ボロ布みたいな服装の方が幾分かマシだ。・・・と思いたい。

当の本人はお腹に手を当てて、僕の方を見上げている。自分の腹の音と勘違いしているのかも。よくよく考えれば、ミシェルは僕以上に何も食べていかない可能性がある。下手をすれば数日間。そう考えたら、焼き立てパンを早く食べさせてやりたくなる。

その彼女は何かを思い出したと/or> 顔つきをして

「リキット＝インデルミッシ！」

「はい！」

思わず名前を呼ばれ、心えてしまつた。どうやら僕の名前を思い出したらしい。

「リキット＝インデルミッシ、クエスト。クエスト・・・したらご飯！」

これを訳すと、僕にクエストを出させて、それが終わつたらご飯を食べるという事かな。仕事をせずに食事を与えられないと考えているのだろう。律儀なことだ。

それにしても、僕がフルネームで呼んでいるとは言え、呼ばれる方となると堪つたものではないと思つ。

「よし、わかつた。その前に、僕の事を呼ぶときはリキットだけで

いいから

「リキット^{ダケ}草？」

どんなキノコでしようか・・・。

「僕、リキット。君、ミシェル」

それぞれの顔を指差して言う、それを2回繰り返す。が、なぜだか顔を膨らませて不満そうな顔をする。

ミシェルは自分の方を指差して言う

「君、ミシェル＝クロウ！」

「・・・自分のことは君とは言わないの」

「僕、ミシェル＝クロウ？」

そういえば、ミシェルが自分ことを、私とか俺とかと言つた事がないことを思い返す。今ここで安易に違うと言つて矯正させる事ができるものなのか？ここは、自分のことを言えるようになつただけで随分な成長と考えるべきなんじやないか。そして、ミシェルが自分の事を僕と言うのを無理に正すのをやめた。

「そうそう、じゃあ・・・」

僕自身のほうを指差し、誘導する。

「君、リキット」

「そう正解！」

それがとても嬉しくて、くしゃくしゃと髪を撫でてしまつ。ミシェルもどことなく嬉しそうな顔をしている。すると、短い蜂蜜色の髪から溢れ出した柑橘の香りが鼻をくすぐる。

その後、何度も自分と僕を指差しながら呪文を唱えるようにつぶやくミシェル。

ミシェルの身長から考えれば、年は12歳前後。もつとも、この年頃の発育は急で、何より個人差が大きすぎる。なので、順当に考えれば12歳、発育が良かつたとして10歳。それでも、言葉の覚

えは何歩分も遅れていて、偏りがあると感じる」ことが出来る。ミシェルの生い立ちを考えれば無理もない話だけ。

「さて、まずは着替えるぞ。ミシェル＝クロウ」

「おう！」

ボロ布を纏つたミシェルに、ギルドの式典に使う冬用の長いケープを重ねて着させ、なんとか体裁を保つ。僕はといえば、いつものローブの制服を羽織っていた。そうした一番の理由はミシェルが僕のことを見つけやすくしたかったからだ。ミシェルが地理的感覚に優れていれば、落ち合う場所さえ決めておけばそれで済むかもしれないが、ミシェルの自立力とでもいうのか、それはまだ全くの未知数でわからない。

そうして今日は、手を繋いで出掛ける。まずは向かう先はパン屋だ。

表へ出ると昨日の大雨も嘘だつたかのように、雲ひとつない快晴だった。朝早くと思っていたけど、太陽はすでに高く登っていて、懐中時計を見ると10時を過ぎた辺りだつた。随分長い時間眠つていたようだ。

早速行き着けのパン屋さんにつくと、そこの女主人がまず口を開いた。

「あら今日ははずいぶんと遅いねえ、今日はお休みかい？」

「ええ、機械が故障しちゃつたんで、今日はお休みで。明日から西ギルドに異動なんです」

まあ、焼きたて目当てに來るので、休みだからとこつてこんな時間に來た事は一度もないんだけど。

「本當かい？ それじゃあ、今まで贔屓してくれた分、今日はサービスしようかね」

「サービスしてくれるのはいいんですが、向こうに引っ越し越すとは言つてないですよ」

「馬でも借りるってのかい？ 豪勢だねえ」

「ははは。その辺りまだ決めてません」

「ところで、その子は、アレかい。隠し子かい？」

やはり気になるらしいが、予想してた質問の中では一番かわしやすい。それは、僕の子供だとしたら10歳頃の子供ということになるからだ、そんなこと本気で言つまい。むしろ、全く質問されずに変な噂になる事の方がよっぽど厄介だった。従つて余裕の笑みを付けて返せる。

「違いますよ。事情があつて預かっているだけですって」

「そうかい。しかしあうちょつと良い服着せてやんなよ？」

それが言いたかったのか。けどそれは僕も重々承知している。見ればケープの端から破れたズボンの裾が飛び出している。

「すみません、このあと買いにいくつもりなんですけど。とにかくお腹が減つて、まずはオバサンのパンを食べさせてやりたかったんです」

女主人は聞くと、膝をおつてミシェルに話しかける。

「お嬢ちゃん、試作品がもうすぐ焼きあがるとこなんだけど、食べてみるかい？」

・・・ミシェルを女の子だとすぐに言に当てる。やはり判る人はわかるものなのだと、自分の見る田のなさを痛感する。

それにも、試作品とはいえ焼きたてがあるのはラッキーだ。

「・・・う？」

「言葉がまだ不自由なんです。せつかなんで頂きます！」

ミシェルに向き直つて、

「試作なんて滅多に食べられないんだぞ？やつたな！」

「うん、やつた」

ややあつて

「ところでお嬢ちゃん、お名前はなんていうんだい？」

「・・・ん・・・ミシェル＝クロウ！」

その微笑ましいやりとりを、僕がどれほど肝を冷やして見ていたかを誰が予想できただろ？。すこし汗をかいだ気がする。

「ミシェルちゃんかい。もう焼けた頃だからちょっと待つてな」

「いやあ、気合いが入つて作り過ぎちまつたよ。まだ半分以上あるから遠慮せずに持つていつてくんな」

「ほんだけ試作してゐるんだこの人は。むしろ、遠慮したい。・・・が、明日から会えなくなるかもと思うとそうもできない。焼いたパンは生モノと違つて腐るより、カビが生える事が懸念される。できるだけ今日中に食べなければと思いつつ、受け取る。

「はい、試作のキヤロットパイ。できたら感想聞かせておくれよ」
「今なんと仰いました？・・・キヤロットパイつて、・・・キヤロットつて貴方。僕苦手んですけど。焼きたて貰つてラッキーディロカ、アンラッキージャないですか。食べられない事はないけど、ハッキリ言つて嫌いだ。

パン屋には食べるスペースがなく、そのまま紙袋ごとパンを持って行くことになる。

「ありがとうございます！」

「ミシェルちゃん、またね～」

手をふつて見送つてくれるパン屋の主人に、言葉を発さずミニシェルは拳を高く突き上げて応えていた。

パン屋を出て大通りへ向かう途中の喫茶店へ入れば、うらぶれたというより、骨董のような良さを感じさせる落ち着いた内装に、リザリアにあつては珍しく魔光灯を使っておらず、蝋燭に火を灯した照明が幾つも置かれており、とても大人びた感じの店に仕上がっている。しかし、客の入りはなぜか少ないそんな店。

魔光灯というは、文字通り魔法で光を発する灯りのことで、一般に売られている物は北の大国から流通している物ばかりで、ある程度の強度がある透明か半透明な容器に、薬品と特定のマナが入った物のこと。魔科学の産物である。

魔光灯の多くは、ガラスに付いた摘みを捻る事で、薬品がガラスの中に入り、それがマナと反応して輝く。ガラスが割れたりするとマナが霧散してしまって、薬品が切れればそれで使えなくなるので、消耗品のように扱われている。キューブの表示にもこの技術が応用されているが、半永久的に画面の表示が出来るキューブはまた特別な技術が用いられてると思われる。

この落ち着いた店の店主であろう、いい意味でくたびれた姿の初老の男性が、ゆっくりと低いが柔らかさを内包する声を出す。

「いらっしゃい」

「薄めの紅茶と何かお勧めのジュースを」

ほかほかの紙袋を見せながら申し訳なさそうにそれだけを注文する。

この店の紅茶は、一種しか茶葉を用意してはいないけど、美味しいブレンドティーを出しててくれる。淹り加減を注文しないといつも濃い。もつとも、この店の主流は「コーヒーらしく、豆なら陳列棚に数多く揃っている。

空いている丸テーブルに座る、もちろん対面にミシェルを座らせて。

「ミシェル＝クロウ、先に食べ始めよう」

「・・・クエストしないの？」

「今日は、いっぱい買うものがあるから、買い物しかしないかな」すると途端に、悲しい顔をして俯いてしまうミシェル。そんなにクエストが楽しみなのと思うと、微笑ましく思える。

「大丈夫、明日からはがんがんクエストして貰うから、今日のところはお休みだよ。ミシェル＝クロウ」

ミシェルはお腹を押されて、今にも泣きそうな顔をして僕を真つ直に見据える。

「・・・クエストない。だから、ご飯ない」

僕の考えとは違った。

まだ一日も一緒にいるわけでもないのに、僕は何を分かつた風に

接していたんだろうか。クエストがしたかった訳じゃない、食べ物を得るためにそうしようと僕が言ったからだ。その僕が今日はクエストは無いと言えば、すなわちそれは、食べ物を得られないと言つ事を意味しているんだ。

考えてみれば、路上生活をしていたミシェルが、僕のよくな見て見ぬふりをする人間に何かを分け与えて貰つては到底至らない。ミシェルにしてみれば、誰かから何かを無償で与えられる事、それ 자체が奇抜なこと、不自然なことなんだ。思考の至らない異常事態なんだ。

とすれば、僕の今の言葉は、今日は飯を食べるなど言つたのと同じ事。

「ごめんミシェル、僕今、嘘ついた。・・・今日のクエストは買い物に付き合う事！・・・で、このパンは先払いだからな、わかつた？」

そう言つてテーブルの上に置いたパンを指差す。すべでミシェルの顔もパアっと明るくなる。

「うん、わかった！」

そう言つて紙袋を抱きしめる。・・・つまり、今日の買い物でミシェルはこのパン全部を手に入れたということになる。

「ミ、ミシェルさん・・・ミシェル＝クロウさん・・・僕に一個だけでいいんでパンを分けてください」「いい

ミシェルは渋々といった風にキャロットパイを一つ渡してくれる。

「ありがとう」「う

すると、マスターが紅茶と黄みががつた白い液体を黙つて置いて行く。ほんのりと豊かでサツパリとした甘い林檎の香りがする。マスターは話す時には優しい口調なのだが、いつも無口だ。

「これはパンのお返し、飲んでみて

「・・・あまりーい！うまいーい！」

口に合つたようだ。さて、問題はこのキャロットパイ・・・。

「いただきます

「・・・？」

「食事を見る時には、食材や食材を育ててくれた人、料理を作つてくれた人たちに感謝の気持ちを込めて、いただきますって言うんだよ」

「ん、いただきますー」

「いただきます」

キヤロットパイを口に運ぶ、にんじんの香りがやたら強く、そして異様な甘つたるさが口を包む。僕はそれを、苦虫を噛み潰したような顔で食べ切るしかなかつた。

ミシェルはというと、よほどお腹が空いていたのか、それとも甘いのが良かつたのか美味しそうに、2口3口と頬張つていく。結局、朝食ながらパン4個という大食漢顔負けの食いつぶりを披露してみせた。

流し込むようにキヤロットパイを食べ、口直しに頼んだサラダが無くなる頃には、ミシェルは目を瞑つて幸せそうにパンの入った紙袋を抱いていた。

アロマ休日～午前～（後書き）

自慰行為です。すみませんでした。全く反省しておつまません。

トロな休日～昼間～（前書き）

「」の作品は、読みにくさをMAXに設定しております。

性的な描[写]やいわゆるH口描[写]、萌えみたいな描[写]は「」ません、
「」メテイータツチの笑える描[写]、愉快で痛快な描[写]は「」ません、

”戻る”か”閉じる”ボタンを計画的に「」利用ください。

トロな休日～昼間～

喫茶店を後にして、そのまま衣料品店を目指す。といつても僕には子供服を取り扱ってる店の心当たりが無いので、大通りをぶらつきながら探すこととした。

すでに陽は昇りきつていて、昨晩の雨跡もほとんど残つておらず、それすら搔き消さんとするように陽気を放つてている。冬用のケープだから、暑いのだろう険しい顔をしているミシェルだが、やはり紙袋を大事そうに抱えてついてくる。昼食は必要無さそうだけど、早く服を一新したいところである。

大通りに面しているからか、ガラス張りの衣料品店をすぐに見つけることが出来た。全面ガラス張りやガラス戸の様な厚手のガラスの製鍊は、製鍊所が限られてくる上、需要も少ないのでかなり高価なのだが、それを差し引くほど集客力があるのだろう。例えば、今の僕のような客に対しても。

蝶番の具合が良いのか、想像より軽い動きでガラス戸を開け店内へと押し入る。

「いらっしゃいませー！」

弾むような軽やかで澄んだ声が響く、見回せば、流行のファッショニヨンなのが店の制服なのか判別の付かない、給仕の格好を模したような派手で明るい暖色を織り交ぜた服装をした、僕と同年代くらいの若い女性店員と、その格好に負けないくらい明るくカラフルな壁紙が印象深く映りこむ。

僕がこの店に入ったのはもちろん、外から子供服が見えたからだ。店員に軽くお辞儀をしてみせて、そそくさと子供服の見えた辺りにミシユルを引つ張つていく。

「これから、クエストに必要なミシユル＝クロウの服を買つぞ、もちろん、ちゃんと着こなしてもらつからな？」

「おー、わかつた！」

思っていたより種類が多く、無地のポロシャツから装飾や刺繡の凝った革ジャケットまである。ふと横を見れば、上流階級の晩餐会について来る子供が来てもおかしくない豪華なドレスが掛けてあつた。僕とミシェルだけで、これと決めるには難がありそうだ。

「お子様の服をお探しですかあ～？」

途方にくれそうだった僕に、救いの手が差し伸べられる。

「ええ、普段着というかを、何着か。まず先に、何でもいいので一着」

「ええ～つとお～、」

「女の子です、」

必要以上に間延びしたそれに答えを返すと、あつという間に上下揃えて持つてくる。ミシェルの顔立ちが男の子っぽいからじゃなく、多分服装のせいなんだろうと思つ。実際、パン屋のオバサンは当てられたわけだし。

「よし、着替えてくるんだ、ミシェル＝クロウ！」

女性店員に案内されて試着室へ向かつ。とりあえず、着替え終わつたら出ておいで。とだけ言って一人で着替えさせる。

しばらくすると試着室のカーテンを下から持ち上げて這い出てくるミシェル。出かける前に言った、ケープを着ておけという僕の指示を忠実に守つているのだろう、ケープを纏つたままの姿だつた。そのケープを剥ぎ取つた僕はぎこけそうになつた。というのも、タータン柄の青いスカートと白いレースのシャツを着ているのだけど、シャツの向きが前後逆で、どうやって履いたのかスカートは裏地が思いつきり外側だつた。

「ユ、ユニークな妹さんですね・・・」

間延びした口調だつたはずの店員がボソッといぼす。マジ勘弁、と聞こえた気がするのは、忘れてしまおう。

「い、今直すんで！」

なかなか離そとしないパン入りの紙袋を預かっていたので、これを左で抱え上げ、右手でミシェルを引っ抜いて持ち上げ、試着

室へ入る。捻つていいので痛みが走るが、そんなことは後回しだ。
「スカートが裏つ返し、シャツはこっちが前。こうして着るんだぞ」

我ながらよく着せ直せると感心する余裕も無く、手早くミシェルの服装を整えると、今の服の分だけお金を支払って、もう少し見ていきますと告げて、元の場所に戻る。面倒くさい客とでも思われたのだろう、それ以降女性店員が話しかけて来ることは無かつたが、結局は普段着4着、下着、軽めのコート、寝巻き、レインコートのお買い上げとなつた。締めて6720^{oren}の支払い、一人の客としては上々の支払いだろう。

^{oren} oreن というのはオルフィードにおける通貨単位の事で、金銀銅の3種の硬貨を使って取引を行うのが主流だ。地域や流通なんかによつても差はあるが、手のひらを広げた位のただの麦粉パン1個が10^{oren}相当する。

金銀銅の順に価値が高い。厳密に言えば、サイズや形状の違いで価値が違ひ、それぞれ金貨3種、銀貨4種、銅貨4種あつて基本的に円形硬貨で、価値と重量が比例する。そのため、大きい物は直径もそつだが厚みも増す。

価値の高いものから順に示すと次のようになる

〈金貨〉

大サイズの金貨 = 50000^{oren}

中サイズの金貨 = 20000^{oren}

小サイズの金貨 = 10000^{oren}

〈銀貨〉

大サイズの銀貨 = 200^{oren}

中サイズの銀貨 = 100^{oren}

小サイズの銀貨 = 50^{oren}

穴あきの一一番小さい銀貨 = 20^{oren}

〈銅貨〉

穴あきの一一番小さい銅貨 = 20^{oren}

大サイズの銅貨 = 10 oreen

中サイズの銅貨 = 5 oreen

穴あきの小サイズの銅貨 = 1 oreen

ベル型の小さい銅貨 = 0.1 oreen

円形の銅貨は真鍮製だが、ベル型の物は銅にアルミニウムを混ぜたもので、特にピースオブオレンと呼ばれている。基本的には、採算が合わない為と考えられるが、このピースオブオレンは滅多に市場には出回らない。従つて、1オレン単位で取引するのが売買における暗黙のルールといえる。

硬貨の価値と物価とを参考にして貰えれば感じ取れるだろうが、銅貨と銀貨が主に流通しており、金貨は価値が高く、特に大きいサイズの物を持ち歩く者はそうそういない。現存する金鉱がダンジョン化しているとこりうのが大きな理由の一つだろう。

「ありがとお、じぞこましたあ～」

女性店員の口調も戻っていたが、それを現金なものと思うのは余りに早計だろうし、世話にもなつてているのだからと、僕も礼を言つと一際可愛らしい笑顔を見せてくれた。

想像以上の出費に、僕の財布は一瞬でくたびれ果ててしまつ。先の事もあって、ミシェルの金銭感覚が僕らと違い、それがミシェルを悲しませる事にならないかとちょっと心配していたが、支払い台の客側の縁が台上より5 cmほど高く作られており、その構造を利⽤して見えないようにお金を払つた。無論、子供に支払いを見せないようになつてゐる訳ではなく、仕立ての作業台として使つてゐるのだろう、その証拠に生地が傷まないよう出っ張つた縁は丸く削られていて、先端には樹脂が固まっている。もつとも、その縁に痛みの引いてきた右手をぶつけて、激痛に顔を歪めることになつたわけだけど。

店を出る際には、女性店員が間延びした口調で同じ事を言つた。

挨拶 자체は特別な事ではないのだけど、驚いたのはそれに対しても、ミシェルが、ありがとー。と返したことだった。僕の真似だろうか、それでもいい傾向にあるのは確かだろー。

綺麗に畳まれ収納されているといつても流石に両手が塞がるもので、僕は子供服一式入りの大きい紙袋を、ミシェルはパンの紙袋を抱えて家に戻ってきた。

何度もぶつけている右手はそろそろ限界が来そうだ。普通、薬局の隣には病院がある、併設されている事もしばしば。もはや、それらはセットと考えて間違いが無いほどだ。小さな診療所にでも行けば、診察してくれた医師が顔を出すような感覚だ。医療費よりも薬の値段の方が圧倒的に安いため、薬局の方が繁盛するのだろう。もつとも、医者も薬もピンきりなのでそれがどうのこうのとは全く言えない。

何はともあれ、まず医者に行こうと思つたのだけど、財布がすっからかんのまま行くわけにもいかない。銀行に行くのもありだけど、今は家の金庫で補充すれば十分だろー。

ミシェルの部屋も決まっていないので、子供服の入った紙袋は居間に置きつ放しにしたまま、お金も補充し外へ出ようとすると、ミシェルがパンの紙袋を持ったままだつた。

「ミシェル＝クロウ、パンは置いていく

「ヤダ」

「・・・誰も取つたりしないし、家の中なら持ち歩くよりも安全なんだ。何せ、パンが潰れないから、美味しいままだよ？」

僕はこれっぽっちも美味しいとは思つていなけれど。すると、紙袋の中身を覗く

「ん・・・わかった、置いてく」

あれだけ大事そうに抱えてれば、どう考へても潰れるよね。そして、ミシェルはパンを置いて行く決心したものの、名残惜しそうな顔をして、家が見えなくなるまで振り返つたりしていた。といつ

ても、角をすぐ曲がつたのでそれほど長い間じやない。

風が吹く度に、スカートを氣にするミシェルだが、初めて履いた、かどうかはわからないが、パンツが見えることを氣にしているのではなく、嫌な涼しさと重量感の変わった感覚、気持ち悪さがあるからだらう。僕も初めてスカートをはいた時にそう感じたから。言つておぐが、学院時代のちょっとした馬鹿騒ぎの余興でやつただけで、女装趣味ではない。ともかく、服装には不安は無くなつた。

ミシェルはおもちゃやら露店の品物に氣を取られず、僕に懸命についてくるので、迷子になる心配だけは無さそうだけど、行動自体はまだ心配な所がある。あまり言葉も発しないが、どれくらいの教養があるかも不明なままだ。

どうせランクハンターエストなんてゴミゴミケーションが取れれば、ミシェルぐらいの子供にだつて難なくこなせる筈だから、その辺りが結局重要なつてくる。などと考えていると、東ギルドにも程近い診療所に到着する。

「今日はどうなさいましたか？」

診療所らしく5人位座れそうな待ち合い用の長椅子が一脚置いてあるだけで、小奇麗にされていて調度品と時計にどうしても目が行く作りで、受け付けには若い男性が真っ直ぐに立つており、白衣を羽織つたこれといった特徴も無い、清潔感を全身から放つているようだつた。

「手を痛めてしまったので、診て貰えますか？」

「では、奥の診察室へどうぞ」

診察室へ入ると、誰もおらず受け付けの男が入つてきて「では、座つて。腕を見せて下さい」

言いながら丸椅子に座る。医者と受付が同一人物ときたか、世の中色んな人がいるものだ。右腕を差し出して、どうして痛めたかの説明を要求された。僕は早く治したいという想いが先行しているので、正直に椅子から落ちて挟んだと話す。医師にちらりと顔を見ら

れ、それが今更に恥ずかしさを誘う。

しばらく、手を捻つたり押したりして、痛みの状態を聞かれてとを続けていたが、終始ミシェルは僕のローブを掴み続けていた。医師が怖かったからか、僕を心配してくれての行動かは不明だけど。

大丈夫。と笑顔で言つても、そのままだつた。

「捻挫です。湿布を貼つて安静にしておいてください。明日、明後日になつたら腫れるかもしぬせんが、その時は温めるように心がけてください」

「はい、わかりました。湿布もお願ひします」

やつぱり、診察してもらつて良かつたと思う。確かな診断もそうだが、アドバイスもありがたく思える。ほんの数分診て貰つただけでも500円と高い出費ではあるが。

その場で診察料と湿布代を払つ。処方薬といつのはその場で調剤して貰うか、薬局で貰うかだ。今回は湿布なので持つて来て貰えればそれで済む。手間をわざわざ増やす必要はないし、薬局に入つたらこの医師が出てきたら、それこそ笑い転げてしまいかねない。いやむしろ、尊敬してしまうかも。

さて、次は何をするんだっけ？

「忘れてた！」

つい口を突いて出てくる言葉。それもそうだ、明日からどうするか決めてすらない。西の空はまだ明るく、太陽もしつかり見えるけど、影はしつかりと伸びており、ずんぶん長くなつてきていた。ここから西ギルド周辺まで行つて、部屋を探すのはほぼ不可能。なぜなら、ミシェルを連れた状態では片道1時間以上掛かるのが目に見えているから。日が落ちる頃から親身に部屋を紹介してくれる場所があるとは到底思えない。

消去法でいけば、馬を探すことになる。厩舎自体はリザリアには多いため、いくつか見たことはあるが貸し出せる馬がいるかどうかは別問題。けれども、こちらの方がよほど確率が高いと思われる。

食べ物を入れると鳴るお腹を制して、覚えのある厩舎へと急ぐのであった。

アロマ休日～昼間～（後書き）

自慰行為です。すみませんでした。全く反省しておつまません。

トロな休日～夕夜～（前書き）

「」の作品は、読みにくさをMAXに設定しております。

性的な描[写]やいわゆるH口描[写]、萌えみたいな描[写]は「」ません、
「」メテイータツチの笑える描[写]、愉快で痛快な描[写]は「」ません、

”戻る”か”閉じる”ボタンを計画的に「」利用ください。

ロロな休日（夕夜）

場所に覚えのある厩舎の一軒に躊躇ひと向き直ると、十歩と離れないところにレー・デがこちらを手指して歩いていた。

「よお、制服のまんまで、何やつてるんだ？」

「これはミシエルが迷子にならなによつて、目印だよ」

「ミシエルって名前になつたのか？つて、女の子だったんだな、見違えたぞ」

それはそうだろう、僕の中にはもうカラスだった時の二の方が嘘に感じてしまつ。それほどの変化が目の前にある。

「やあ、ミシエル、覚えてるかい？昨日、ギルドにいたお兄さんだ」「んー？知らない」

覚えてないらしい。といつが、つこにミシエルで反応し上に、クロウを主張しなかつた事に僕の苦労が少しでも報われた気がする。だけど、僕が呼んだことに対する反応じゃないって事が、なんだか納得いかないというか、悔しいというか。残念でならない。

「そつか、そいつは仕方ない。・・・お兄さんはレー・デつていうんだ、よろしく」

言いながら腰を落として、笑顔でミシエルの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。撫でられるのが好きなのか、ミシエルも笑顔になつて。

「おー、よろしく！」

おう、は無いだろう・・・。つここんな事をしている場合じゃなかつた。

「ごめんレー・デ、今急いでるんだ。馬を借りないと・」

「馬で通つこにしたのか？」

「いやあ、まあ・・・うん、まあ・・・そつ

「お前、忘れてただろ・・・」

「ごめん」

「まあいいが、早く行つてこ・・・またな？ミシエル」

「またなー」

「ほら、急げ！」

僕の背中を叩くように押してそう言つたレー^デは、僕達が見えなくなるまで見送つてくれていた。

そして厩舎に着いたものの、人の姿が見えない。

「ヒィィィィーーン！」

脚を上げ、蹄で地面を叩き鳴らして完全な警戒モードの馬たち。といつても、馬房から出ることは出来ないからこりらは安全なのだが、歓迎はされてない事だけは伝わってきた。ミシェルも怯えて僕の後ろにくつ付いている。

「誰かいませんかー！」

返事はかえつてこない。

安全は安全なのだからと、僕は勇気を出して中へ入つていく。するとどうしたことだろうか、馬の脚踏み音はどこかへ消え去り、心なしか、近くにいた馬ほど馬房の奥へと距離を取るうとしている気がした。馬は基本的に臆病な性格と聞いたことがある。もつとも、ここまで警戒されたりしたのは初めてだった。

「誰かいませんかー！」

同じ台詞で呼びかけると

「へいへい、御用ですかい？」

出っ歯が特徴的な小柄な中年男が、空の馬房から姿を現す。

「良かつた、馬を一頭借りたいんですけど」

「えーえー、よろしいですとも・・・で、馬を借りたことは?」

「借りたことはないんですけど、飼つてはいました」

「ほーほー、どれくらい借りたいんですけど」

「予定は1週間で」

「はいはい、そしたらこっちへ・・・馬を選んでもらえますかい?」

案内された先には、ずんぐりむつくりで脚も太い馬、背が高く脚の細長い馬、背が低く胴が長い馬と、大小様々な馬が並んでいる。馬

ばかりでなく、ラマ、ロバ、牛、羊までいる。

この中から選ぶとしても、街中を走るだけなので、特別スピードは要求しない。荷を大量に乗せるわけでもない。騎乗用動物ならどれでもいいくらいだ。とりあえず、一頭ずつ見るために厩舎内を巡る。すると先程まで僕にくつ付いていたミシェルがとある馬房の前で、跳んだりしゃがんだりして中を見ているではないか。戻つて見ると、その馬房には早く走るために改良された馬種、サラブレッドがこちらを見つめている。その馬は白い毛並みに茶色の斑点模様をしていた。

ミシェルはおもむろに近付くと、馬房に渡された木枠をバシバシと叩き始める。気に入つたのだろうか、それとも挑発してゐるのか。白い茶斑点のサラブレッドがそれに反応して、嘶きながら両前足を高々と上げる。まるで一足歩行でもしようとも立ち上がつたみたいだつた。危険を感じた僕は咄嗟に、両腕ですくう様にミシェルを抱え上げた。

サラブレッドが落下するように前脚を下げ元の姿勢に戻ると、ゆつくつと頭を下げこちらに近付ける。その頭をミシェルが両手で撫で回す。馬流のお辞儀の仕方だらうか。

「おやおや、お客さんこいつに好かれるとは珍しいですね」「今つて好かれたつて事なんですか？」

「えーえー、いつも客を乗せるどころか、触らせようともしないんでね」

そんな馬貸し出さうとするなどいう突つ込みは、この際置いておこう。

ミシェルが撫で回している間、馬は動かずに撫で回されている。中年男の話が仮に嘘だとしても、気が合つてゐるのは確かなようだつた。

「じゃあ、この馬を借ります

「はーはー、それじゃあ保証金4000円を含めて、こんなとこねですか」

どこから出したのか算盤を弾いて、見せてくる。算盤の見方は分かるがどうも疎い。やつとの思いでいくら提示してきたかを理解する。

「高っ！」

中年男が提示してきた額は9820円だ、いくら保証金を含んでるとは言え、これなら一頭買った方が安い。どう考へても、足元を見るボツタクリ価格だつた。

「おやおや、冗談ですよ田那、本気にしないでくだせい」

冗談には全く感じられないが、さも当たり前のように流して、算盤をします。

「ではでは、200円ばかりでお貸ししましよう・・・など、今なら貸し出し期間分の飼葉もお付けしますぞ！」

「あー、この街に住んでるんで、分かりますけど・・・500円で十分ですよね？」

男はジトツとした眼つきに早変わりすると

「へいへい、そんじゃあ500円で・・・」

そう中年男のやり口は典型的だつた。まず保証金と法外な貸出し代金を合わせた額を提示して、次から保証金を抜いた額で話をする。それも貸出し代金は半額以下で、飼葉も付ける。これで相手が話を飲めば万々歳。飼葉も譲渡はするが運ばないので、更に運び費が必要になる。飼葉なんて実際、厩舎では必ず売られている、それもとても安価で、何丁分もの飼葉ともなれば相当な量となるので、運搬費としていくらボツタクられるか知れない。

「あと、100円足すんで飼葉を定期的に家に送つて下さい。場所は・・・」

結構近いし、割高かも知れないが、手間賃と考えれば痛くは無い。

「はいはい、わかりましたとも、商売上手ですなあ田那」

とはいへ、ミシエルを預かることになつてからこちら、働いて貯めた給料の他、貯蓄を一気に散財している。当面、次の給料までは十分持つものの、銀行にはあまり預けておらず、何か入用になつた時には危ないだろ？。気は進まないけど、金銭面で両親を頼ることを

覚悟しておく必要があつそうだ。

馬をつれて帰路につく頃には、太陽はすっかり姿を隠しながらも、西空を赤く照らしその存在をしつかり主張していた。僕は手綱を引き、ミシエルは嬉しそうに馬の首筋にしがみついている。

「ミシエル、馬に乗るのは楽しい？」

「うん！ 楽しい・・・ミシエル＝クロウ！」

直されてしまった。ミシエルと呼んでも、もつ大丈夫そうだ。

「馬の名前も考えないとね」

「名前？」

「そうそう、こいつの名前」

「パカパカ！」

「そ、そ、う。いい音・・・いや、名前だね・・・よし、今日からお

前はパカパカだ」

まあいいか、結局馬を借りる」ことは出来たし、今日の買い物の首尾は上々だろう。

明日からの事だけど、よくよく考えればミシエルを一人残して置くことは出来ない。ギルドに連れて行くしかないんだ。今更そんな事に気付くなんて考えの足らなさを痛感する。

ギルドに連れて行つた後の事に、今から氣を揉んでも仕方がない。西ギルドの職員がいい人たちであることを願うしかない。

ミシエルとパカパカを庭に残し、そそくさとキッチンに向かつ。お腹を満たすために調理をする、調理といつても肉や野菜を適当に刻んで炒めただけの物と、固形調味料をお湯で溶かしたコンソメスープだ。料理を食卓に運び、ミシエルを呼んで来る。

「ミシエルのパン二つと、こつちの炒め物とスープを交換しないか？」

足の着かない椅子に大人しく座つて、じつと肉野菜炒めとコンソメ

スープを見つめていたので、そう切り出した。

「うん、取引する」

「頂きます」

「いただきまーす」

最初からそのつもりだったのだけど、やはりキヤロットパイを直接口に放り込む気になれなくて、潰れたキヤロットパイをコンソメスープに浸す。スープにパンを浮かべる事が想像の外と言わんばかりにミシェルは不思議そうな顔をする。

「こうして食べるのも有りかなって思つてね、より美味しく食べるために考えて、工夫したりするんだ。まあ、よく失敗するんだけど・

・・うん、美味しくなった」

中身をよく混ぜて口にすれば、甘さはスープに溶け出し、さながらキヤロットスープに大变身、パンのしつとり感が口に残るのも悪くは無い。具には煮立てたような甘さはあるが、僕の中ではパンとして食べるよりは遙かに高評価となつた。

「ん~、つま~い!」

真似をするミシェルの評価も良かつたようだ。炒め物の評価は無かつたものの、残さず食べたので良しとしよう。結局、キヤロットパイは当日中に食べ切つてしまつた事になる。満腹のお腹を撫でるミシェルを残し、後片付けだけ済ませてしまつ。

ミシェルの部屋には、僕の部屋の向かいのゲストルームをそのまま使うことにした。寝具やクローゼットがあるからだけど、埃が結構積もつていたので、大掃除をする羽目になつた。それでも一人で掃除をしたら予想よりも早く終わつた。

埃を被つた服を洗濯に、そして、額に流れる汗もそのままにぬるく温まつた風呂に一緒に入る。昨日はペチトを洗うみたにミシェルを洗つたけど、今日は手本を見せながら、ミシェル自身の手で身体を洗わせて、それを手伝つた。終わり掛けには素早く洗えるようになつていた。ついでに歯の磨き方を手を取つて教えた。

買ったばかりのパジャマを着させて、居間でくつろぐ。ミシェルは居間にある小窓に乗り出してパカパカを眺めている。パカパカは脚を折り、身を伏せて眠っている。

思い返すと、ミシェルの事を考える暇が今まで無かったと、一先ず、現状を整理しておこうと思つ。

ミシェルと出会ったのは一昨日、デュライという若いソルバーを中央ギルドへ案内する途中、デュライのクエストアイテムの入ったと思っていた空袋を盗んだ後、彼に取り押さえられた。因みにその時抑えられて出来た痕は殆ど治つている。

そして、中央ギルドで僕が質問をすることになった。その時の内容からすると、物品をお金に換えてくれる取引相手がいたこと。取引相手とミシェルの関係は直接関係が有るようだつたけど、他の者も相互関係は不明なまま。ミシェルにとって、生きるために行動が盗むという行為だつたのだろう。取引相手にお金を貰つていたと言つことはミシェルは何かを買つていたと考えられる。少なくともお金の使い方はわかるだろつ。というか、今まで独りで生きてきたんだから、僕なんかよりミシェルの方がよっぽど遅いんじやないだろうか。

結局ミシェルの身柄は、軍に引き渡す事を拒んだ僕が依頼主となつて、ミシェルをソルバーとして雇うという構図で、僕がミシェルを預かることになった。もつとも僕が出任せに言つているだけで、ギルドを通した仕事ではないので、ソルバーではないけど。

これだけ考えると、僕が心配性なだけで、ミシェルをすぐ下ランクハンターにして放つておいてもいいのかも知れない。けれども、乗りかかった船という言葉もあるし、何より、このままミシェルの事を投げてしまうのはあまりに無責任というものだろつ。

経緯としては、ギルド職員である僕が心配症とでもいうのか病気を起こし、浮浪少女を引き取つたって事かな。

推測ばかりだけど、ミシェルの生活面での現状は、まず物覚えは良さそうだという事。性格は控えめで大人しいと思う。言葉については浮浪児が持つような弊害があるのでなくして、無口なだけかも知れない。蜂蜜のような金髪に、やつ寝てはいるけど特徴の少ない顔立ち、特徴が少ないってことはその分整っているつて事、だからきっと美人になるだろう。

そんな事を考えていると、窓の外に見えていた灯りは随分と減つてきており、床ではミシェルがゴロゴロと転がっていた。

「じるじる～」

「あつこらー・パジャマが汚れるじゃないか・・・もう寝ようか

「お～」

霸氣は無く、眠気しか帶びていらない返答を聞くと、手を引いてミシェルの部屋へと連れて行く。ベッドに寝かせ、毛布を掛ける。

「僕は向かいの部屋で寝るから、何かあつたら来るんだよ？」

「お～」

もう夢の世界へ身体を半分以上突っ込んでいるようだ。何かあつたらと言つても、トイレには一人で行けるし、もう眠りううなので心配は要らない。そんな訳で、僕も自分の部屋へ戻つてベッドに潜り込むとそのまま意識を失つた。

アロマ休日～夕夜～（後書き）

自慰行為です。すみませんでした。全く反省しておつまません。

キイな仕事／事件／（前書き）

「」の作品は、読みにくさをMAXに設定しております。

性的な描写やいわゆるH描写、萌えみたいな描写はございません、
「メテイタツチの笑える描写、愉快で痛快な描写はございません、

”戻る”か”閉じる”ボタンを計画的に利用ください。

キイな仕事／事件／

朝の日差しを浴びる前に起きたのはいつ振りだろう、窓の外では太陽が顔を出そうとしている所だった。それでも太陽との競争に勝った優越感には浸れず、ぼんやりとしていた。悪夢を見て目が覚めたのだったけど、どんな夢だったかは忘れてしまった。レー・テとテュライが出てきた気がする。頭を振るうが、視覚だけは覚醒するものの、頭の中はぼつともやもやしたまま、ついついぼうつとしてしまつ。

寝癖もそのままに、ミシェルの部屋を覗けば、毛布がベッドの下に落ち、ミシェルは三日月を形取つて横になつていて。毛布を拾いふんわり掛けて、そつと部屋を後にした。

パカパカはといえば、いつの間にか運び込まれていた飼葉を美味そうに食べていた。干草と果物だろうか。隣にはワイン貯蔵などに使う小さな木樽が置いてあり、開いた蓋からは水が入つてるのが見える。気を利かせたサービスだろうか。

いつもより早めに家を出る必要があるので、このままぼんやりとしていたら時間が無くなつてしまつ。身支度だけ整えると、そそくさとパン屋を目指す。これが僕の日常だ。

この時間は焼きたてパンの数が違う。食パン、硬パン、バターロールはもちろん、カレーパン、クロワッサン、ベーグル、デニッシュ、パインパイ。ううん、食欲をそそるいい香りだ。

「おや、おはよ、ミシェルちゃんはどうしたんだい？」

「まだぐつすり眠つてますよ」

「そうかい。これから、西ギルドまで通いかい？」

「ええ、馬を借りたのでそれほど急がないんですけど
クロワッサン、砂糖蜜掛けのベーグル、ソーセージパン、アップルパイを取つてオバサンに渡す。

「大変だねえ、ま、頑張んな！」

「はい！」

「ところで、キャロットパイはどうだった？」

「僕はちょっと・・・。ミシェルは美味しそうに食べてたんですけど」

「こんな所でおべつかを使っても仕方が無い。」

「甘すぎたし、そうだろうねえ。残して捨てるのも勿体無かつたし、ミシェルちゃんが美味そうだったって言うんなら良かつたさ」

・・・。オイ。と心の中で突つ込みを入れて、紙袋を受け取る。

「今度はミシェルちゃんを連れてきなよ？」

「はい」

家の戸を開ければ、すぐさま僕を見つけたミシェルが走つて、突つ込んでくる。

「ぐはっ」

腹部に大突撃である。

「どうしたんだ、ミシェル」

「どこ行つてた！」

「朝御飯を買つてきただけだよ」

ミシェルは、うへへへと唸つて頭を僕のお腹に押し付ける。結構痛い。

「心配してくれたんだね、ありがとミシェル」

そう言って、頭を優しく撫でる。まだ唸つて頭をめり込ませているが、弱くなつた気がする。

「昨日のパン屋さんのパンだよ、キャロットパイじゃないけどね」

そう言って紙袋を見せる。ミシェルはそれを見上げる。紙袋越しにパンの香りが流れ出す。

「ん、許す」

今日はコーンアム産とルーナタウン産のブローケンオレンジペコを

7：3でブレンドティーを作る。凝っていると言われるが、僕が気に入っている種類の物を4つ揃えて、等級も1、2種類しか置いていない。実家に置いてある茶葉はもつと産地、種類と等級が多い。もつともそれは、客人の好みの合わせられる様にってだけで、普段使う茶葉は大体同じだ。沸かしたお湯と茶葉を淹茶ポットに入れ、そのポットを鍋の湯につける。これが僕の紅茶の淹れ方なのだから、変だと言われようが仕方ない。

一つはそのまま。もう一つは砂糖を多く入れ溶かし、湯煎ならぬ水煎で少し冷やし、ぬるくして。

「さあ食べよう。この中から2つ選んで」

紙袋を開け、パンを並べる。

「ん～～～～～」

それぞれ見比べているが、決めかねているようだ。考えにくい事だけど、もしミシールがパンを食べたことが無かつたとしたら、判断材料はキャラットパイしかないわけだ。選ぶっていうのは、過去の経験や体験から選んだ未来を連想し、予想することに他ならない。もちろん、例外もあるけど。そう考えたなら、判断材料の多さは選択を容易にし、判断材料の少なさは選択を困難にしてしまう。

「じゃあ、4個とも半分こにするか？」

「おー、半分こ～。半分こする～」

クロワッサン、砂糖蜜掛けのベーグル、ソーセージパン、アップルパイを包丁で半分にする。クロワッサンは断面が完全に潰れている、ベーグルとソーセージパンもそこそこに潰れた。ちょっと残念だけど、仕方ない。

「いただきまーす」

「頂きます」

ミシールの評価によると、第一位はアップルパイ、第二位はソーセージパン、第三位はクロワッサン、第四位は砂糖蜜掛けのベーグル、第五位は紅茶だそうだ。パンは全部うまい！と言いながら食べていたけど、紅茶に関しては、ジュースの方が美味しかつたらしい

事、それだけを仰いました。味覚が違うのは当然だけど、このままだと僕は味覚に対する自信を失いそりですよ、ミシール先生。

「リキット、今日のクエストは？」

「えー、今日のクエストは、なんと・・・」

「何も考えてません。」

「西ギルドに行つて・・・」

「行つて？」

「・・・大人しくしていろ事!」

「?」

「じゃなくて、やっぱ、向こうに着いてから、掃除をするとか、色々決めよう」

「わかった!」

「さあ、着替えて」

「おー!」

ミシールの着替えを手伝わず、自分で全部やらせる。時々、このボタンはこっちとか言つただけだ。それでも、順調に着替え終えた。ドレスや正装のような特別な着方のあるものでなければ、すぐに憶えてしまうだろ? 今日の服装は、白のカツターシャツと、黒を基調としたゴシックパンツでひらひらの装飾が多い。ミシールの一番のお気に入りらしかった。

ボサボサ髪では勿体無いと思つたので、今日からミシールの髪を梳く事にした。ボサボサ髪と言つてもショートなので、手間はそれほど無かった。

「おつと、遅刻しちゃうかも。行こうーーいってきます

「いってきまーす」

ミシールは相変わらずパカパカの首にしがみ付いているが、今はその方が助かる。とはいって、遅刻するかもと言つても、サラブレッドに街中を全速力で走らせたりはしない。駆け足で程度で十分だ。それでもかなり早く、20分と掛からずに到着するかもと思つほど

だ。

「いいぞ、パカパカ！」

「パカパカはいいぞー！」

大通りを走るのは初めてで、これほど速度感があるものかと少し驚いている。実際、街中と野外では全く、感覚が違う。全速力で走つたらきっとスリルがあるだろうなんて考えていると、すぐに西ギルドに着いてしまう。

とりあえず、パカパカを近くの厩舎に預けてくる。

「おはようございます、東ギルドから来たリキットです」

「やあ、話は聞いてるよ。俺はネスト。あつちは・・・」

大工ですと言わんばかりの、肉付きと日焼けをした大柄の、若くも老いてもいない男はそう言って、奥を指差そうとする。

「おはようございます、私はマルガレットです！マルガって呼んでください！リキットさん！」

奥から指差される前に、眼鏡をかけた女の子があつという間に僕の目の前までやってくる。

「は、はい」

「ところで、こちらのお嬢ちゃんは？娘さんですか！」

目をキラキラ輝かせながら聞いてくるマルガ。

「いえ、事情があつて預かつてる子で、ミシェルって言います」

「ミシェル＝クロウ！」

「そつか、ミシェルちゃんね～よろしくね～」

そう言って、ミシェルの手を握るマルガの表情は恍惚としており、今にも口の端から涎を出しそうな勢いだ。

「マルガはお喋りで、しかも色んな話に首を突っ込むのが大好物なんだ。お前さんも運が悪かったと諦めてくれ」

そうネストが耳打ちしてきた。

「まあ、短い付き合いかもしれないが、よろしくな

「はい。よろしくお願ひします」

「よろしくー」

「そんなん、短いだなんて言わないで下さい。寂しいです。クスン・
・・・・・とこゝるーでー・・・」

そうして、数時間に及ぶマルガの質問責めが始まった。その責め苦は、ミシエルがお前めんとい！と言つまで続くのであった。

ミシエルはマルガを無視しながらも、懸命に掃除をした。その結果、西ギルドの中は光り輝きそうなほど綺麗になつた。逆に、昼食のメニューにミートスパゲティを食べた時の汚れも手伝つて、ミシエルの服は一日でずいぶん汚れてしまった。

良くやつたと撫でて、「褒美を考えてみたのだけど、これといつていいアイデアも思い浮かばなかつた。

別に浮かんだアイデアの中に一緒に料理を作るという生産的なものがあつて、今日はそれを実行することを決めた。

帰り道、パカパカに乗つて早足で進む。途中で、芋、人参、玉葱、豚肉、カレー粉を買って。そう、今日はミシエルと一緒にカレーを作るつもりだ。カレーは元々、サリッサ地方に伝わる伝統料理に使う、何種もの香辛料の粉末を混ぜ合わせた、粉の事をいう。その粉を使った料理は痺れるような辛さと、鼻と食欲を刺激する香りが特徴的だ。しかし、サリッサ地方の人間でない僕たちの言うカレーとは、サリッサカレーをベースにまろやかに仕上げ、旨みを増やしたカレー粉を大量の水で溶かし煮込んだソースの事をいう。サリッサカレーを使った赤いソースを本格派カレーというのに対し、今日作ろうとしている黄色のソースは央風カレーという。

もうすぐ家に着くという所で、レーデが東ギルドに入つていくのが見えた。僕も東ギルドの様子が気になつていたので、馬を停め、後を追うことにした。

「ミシエル、ギルドの様子を見てくるから、パカパカと一緒に待つてて」

「わかつた、待つてる」

待つていろと言いつつも、首に巻きついているわけだけど。

ドアベルが鳴ると、中にいた修理に来ていた男2人女1人そしてレーーデは全員こちらを注視していたが、相手が僕だと分かるとレーーデが僕に近付きながら言つ。

「お前、どうしてここに？」

「レーーデが入つてくのが見えたから、僕もギルドの、キューブの調子がどうなつてゐるのか気になつて」

「・・・・そうか。キューブはまだまだ、だそうだ。まあ一日目だしな・・・・ギルドの方は、見ての通り、全てのキューブを切つて開いてもないさ。職員も居ないしな」

ギルド内を見回すとその通り、キューブは全て明かりを失つていた。

「ところで、西ギルドはどうだつた？」

「うん、仕事は暇なんだけど、職員の人達が個性的でね。そっちこそ、中央ギルドはどうだつたのさ？」

「ああ、中央も暇さ」

「やつぱりそつか。中央の人達はどんな人だつた？」

「まあ、良い人達だよ」

「・・・・そうだ、ミシェルと一緒にカレーを作るつもりなんだけど、今日時間ある？」

「カレーか、いいね。もちろん。食べさせてもらえるんだろ？」

「うん！じゃあ、行こう」

「ああ。・・・・それじゃあ、後はお願ひしますよ」

「修理、頑張つてください！」

修理職員の女性が代表して応えた。

「任せてください！美味しいカレー、楽しんできてください」

ギルドを出てパカパカとミシェルの待つていてる方へ、歩き出す。すると、夕日を反射した何かがキラキラと光つて、上から落ちてき

て、僕の首元で止まる。

「動くな」

本で読むようなお決まりな台詞を聞いても、僕の首の前で止まつているのが剣だと認識するのにしばらくかかった。

その声には聞き覚えがあり、すぐに赤い髪の少年を思い浮かべる。横目で確認すれば、赤い髪と黒い衣装をしている事だけがわかつた。

「・・・デュライ？」

「隣のお前、逃げるなよ？」

「デュライ、一体何をしてるのさ？」

完全に理解不能だつた僕は、質問を投げかけるしかなかつた。デュライは剣を僕の首前に置いたまま、押して、剣の刃の付け根を僕に、刃の先をレー^テの首元に流れるよつに付ける。すると、デュライがちょうど僕の目の前に立つ形になる。

「そつちのお前・・・」

「リキット！」

ミシェルの声だ。デュライの影越しにミシェルが全力疾走で駆けてくる。そして、そのままデュライ目掛けて飛び込む。

「・・・チツ」

舌打ちをしながら、僕の真隣へと半回転しながら、するりと剣を引き構えるデュライ。

飛び掛ったミシェルと、僕の間に由い3本の痕線が奔る。着地したミシェルの右腕には見たことの無い、動物の爪の形をなした武器がはめられていた。それは爪^{クロ}と言われる武器だろう。黄と茶色の手袋の甲側から伸びた3本の白い凶器が、動物の爪のように内側に曲がっている。クローは相手の四肢を引き裂く武器だ。睨み合つミシェルとデュライ。

「その武器・・・あの時のガキか？」

「リキットから離れる！」

「どんな魔法使って出してるか知らないが、それじゃ俺には勝てねえよ」

「・・・リキットから離れる！」

一度言つて、飛び掛るミシェル。だがデュライは、簡単に爪の間に剣を下向きに差し入れると、そのまま払うように剣を押し込む。地に足が着くや否やミシェルは後方に押しやられる。

「大人しくしてろガキ！」

剣を引き少し間を空けると、力任せに振り上げる。その軌道上にミシェルの武器と頭がある。剣先はまたしでも爪の間を捉えて、ミシェルの爪は右手ごと宙に投げ出される。デュライは身体を左回転させて剣を一周させる。

「危ないミシェル！」

僕の叫びは届いたのか、弾き飛ばされた右手と爪を外向きに身体の左側へ置く、左手を爪の真っ直ぐに伸びた部分に添えて、間も無く、下から上へスライドしながら回転するデュライの剣が容赦なく飛んでくる。爪と剣が交差して、ミシェルは剣に掬い上げられるよう拾われて、そのままギルドの壁へ叩きつけられる。

「ぐあ！」

ドツツツと鈍い音を立てた後、壁に叩きつけられたミシェルが、壁に弾かれて落ちていく、ミシェルが、倒れる。

「ミシェル！」

すぐに駆け寄り膝を突いて抱き寄せる。

「ミシェル！ 大丈夫か！」

「う？・・・だい・・・じょーぶ」

僕はミシェルを覆い抱きしめる。

「さあ、待たせたな？」

レーデの方を向き直るデュライ。もう、何が何だか分からぬ。ミシェルを一刻も早く医者に見せたいが、レーデを見捨てていくような事はできない。

「・・・許してくれ」

僕には、そのレーデの言葉の意味が全く分からなかつた。

「知つてゐる事を吐いてもらおうか」

「ああ、わかつた。・・・・・初めは偶然だつたんだ。・・・つ
いつつカリソルバーの事を話してしまつて、それを聴いていた奴が
俺に話を持ちかけてきた。ソルバーの情報を売れと。・・・どうし
ても金が必要だつたんだ」

レーデの言つてゐるのは多分、失敗報酬0%の薬素材クエストの
ソルバーの事だとすぐにわかつた。ミシェルがデュライのクエスト
アイテムを狙つた事、デュライを狙うように誰かからの情報を得て
していた事、レーデがデュライの情報をその誰かに流したとすれば、
全ての流れが合致する。

それは失敗報酬の無いクエストがソルバー、依頼人とも互いを知
らずに進行するクエストで、その最たる例がアイテム收拾という事
に尽きる。この場合においては、ソルバーの情報は一切外部に出さ
れる事がない。これはソルバー保護という要素が強い。今回におい
てはデュライがそのクエストを受けたことは、僕とレーデしか知ら
ないことになる。

ちなみにその逆、失敗報酬の有るクエストは内容によって、顔合
わせというものが出来る、クエストを引き受けるソルバー、依頼人
が互いを雇われ、雇う事をクエスト前に確認できる制度だ。もつと
も相当慎重な人間しかこの制度を使つたりしない。

「フン、お前の事情なんてどうでもいい・・・俺が知りたいのは、
その情報を買つてる奴の事と、その居場所だ」

デュライが剣を向け、正直に話すレーデに詰め寄る。

「・・・奴は依頼人じゃないが、居場所なら知つていい
「じゃあ、案内してもらおうか?」

「ああ」

「・・・すまない、リキット・・・こんな事に巻き込んで
「・・・レーデ」

「早くミシールを医者の所まで運んでやつてくれ・・・」

「・・・うん」

レーデはゆっくりと歩き出した。デュライは剣を鞘に收め、何事

も無かつたかのように」レーーテの後ろを追う。

「ミシール！ すぐに医者に診せてやるからなー！」

「えー、医者ヤダー！」

「言つと、すぐつと立ち上がるミシール。・・・えーと・・・全然・・・元気に見える。

「大丈夫なのか、ミシール？」

「うん！ 大丈夫」

壁に叩き付けられたのになんて？ と困惑している僕の頭の中に声が響き始める。

（リキッドとやら、ミシールを心配してくれるのは有り難いのだが、この子は大丈夫だ。問題無い）

「えつ？」

その低い声ははつきりと響いて聞こえるのだけど、周りを見回しても、離れた所に一連の騒動により出来たと思われる人だかりが残っているだけで、その声とは距離感が全く違つた。

（僕はここだ、ミシールの右手・・・この武器に宿る精霊だ）

「・・・せいけい、と言いますと、あの精霊ですか！」

精霊というのは魔法の基礎となる能力を持つ存在の事で、普通には見ることが出来ない。魔法は精霊との契約によって体内外のマナを使用することで発動する能力というのが魔法の通説で、精霊無しに魔法を使う事は出来ないとされている。

因みに、魔科学と魔法はマナを使う事以外は、全く別の分野で共通点が無い。なので、魔法や精霊について詳しい事は僕は全く知らない。

（喋りずとも良い。お主とは通じた故、お主が伝えたいと思い考える事であれば、僕には伝わる。それに精霊云々と口にする事は、お主にとつても良い結果には成り得ぬ）

（・・・えつと・・・）、「こうでいいのかな？」

（うむ、宜しい。・・・申し遅れたのだが、故あつて本来の名は教

えられぬ。今は器の名を借りてパンサークローラーと名乗つておる）

「そ、そだ！ミシェルは無事なんですか！」

つい喋ってしまったけど、これって、周りの人から見たら、デュライに襲われた恐怖のあまり精神が錯乱しているように見えるんだうつな。

（詳しく話すには時と場が適切で無い故言及せぬが、ミシェルは無事だ。）

デュライに連れて行かれたレー＝デも多分無事だ、と思いたい。レー＝デが危険になるとしたら、レー＝デに対し用の無くなるデュライよりもむしろ、情報を売つていたという相手が逆上した時だらう。そういえば、さつき精靈はパンサークローラーと名乗つたつけ。ミシェルがカラスだつた時のストリートチルドレンのワーダーと同じ、パンサー。

（・・・聞いておるか？）

「え？」

（場所を変えぬか、と申しておる。・・・それに、ミシェルもカレーとやらを、一緒に作るのを楽しみにしておるのだ）

「おお、カレー！カレー！」

色々あって少し混乱気味だけど、レー＝デをこのまま放つて置いていいのだろうか？レー＝デは確かに自分の非を認めて、デュライを案内した。ミシェルの身を案じてくれた親友の窮地を見過ごす事が出来るだらうか。ミシェルは無事である以上、その答えは簡単だ、そんなこと出来ない。

「ごめん、ミシェル。レー＝デが心配なんだ。カレーは後にして、後を追わせて欲しい」

「うん、わかった」

（それは良いのだが・・・後を、追えるのか？）

レー＝デとデュライが向かつた方向には、もう彼らの姿を確認することは出来なくなつていた。すぐ角で曲がつたとも、デュライが急かしたとも考えられる。いずれにしろ向かつた先は、東ギルドより

西・・・ほぼリザリア全域だ。心当たりでもなければ探しよつが無い。

「そうだ！・・・ミシェル、デュライが金田の物を持つてゐて、教えてくれた人が何処に居るか知つてる？」

「ん~、知つてる！」

「ほんと！そこに案内できる？」

「うん！」

（では儂はしばらく消えるとしよう）

聞こえるや否や、ミシェルの右手の爪武器パンサークローラーは見えなくなる。ミシェルの右手の周辺を慎重に探るが、何かに触れることはなく、本当に消えてしまっていた。

パカパカに乗り、ミシェルにの先導で向かつた先は、昨日立ち寄つた診療所だった。

キイな仕事～事件～（後書き）

自慰行為です。すみませんでした。全く反省しておつまません。

キイな仕事→解決→（前書き）

「」の作品は、読みにくさをMAXに設定しております。

性的な描写やいわゆるH・口描写、萌えみたいな描写は「」ません、
「」メテイータッチの笑える描写、愉快で痛快な描写は「」ません、
”戻る”か”閉じる”ボタンを計画的に「」利用ください。

キイな仕事／解決／

街全体が赤く染まり、診療所もオレンジの炎で燃えているようだつたけど、火事になつてしたりはせずに、ただ夕日色に染まつていた。

診療所の外から見る分には、レーデやデュライの姿も無く物静かで、日常の風景のようにしか見えなかつたが、ここで無為に過ごしていても仕方が無いので中へ入る。

「すみません、もう休診の時間なんですが・・・？」

昨日の医師兼受付の男性がそこにいた。何事も無いことはいい事なのだけど、何事も無さ過ぎて焦る。

「え、えっと。僕と同じギルド職員と、赤い髪の少年が来ませんでしたか？」

「さて？今日は特に来診が多かつたが、昨日の君以来には見なかつたと思うね」

「ミシェル・・・本当にここなのか？」

「うん、南の遺跡？から出て来た人なら稼ぎになる物持つてるって言つてた！」

「私が？そんな事言つたかな。・・・まあ儀式跡地からは、確かに強力な麻酔薬や、興奮剤が作れる素材が手に入るから、医者なら重宝するかもね」

確かに、ミシェルはデュライがお金になる物を持つてると教えられたんだつたつけ。ミシェルがデュライのクエストアイテムを狙つていたのは、ここでそういう話を聞いた事による行動だつたのだとすると、レー『テと謎の人物、謎の人物とミシェルという繋がりが消えてしまつ。

「ところで、湿布が入用だつたかな？急いでいるので診察は困るのだが・・・」

「あ、いえ。すみません。勘違いだつたみたいです」

言つて、そそくさと退散する。

（先程の話だが、何処かでその様な話を耳にしたので、薬剤の素材が高額で売れるやもと、儂がミシェルに進言したかと存じる）

パンサークローが姿を見せて、そう言つ。

待てよ、つまりこれつてもしかして、完全に見当違ひだったんじやないか？

レー＝デは一体何処に向かつたんだろう？ とりあえず、レー＝デとデュライの事を整理してみよう。

とはいっても、レー＝デがそんな不正をしていたなんて全く知らなかつたし。レー＝デとはよく一緒に飲んだり、互いの家で遊んだりしているけど、それ以外でしかも偶発的に知り合つたという相手に辿り着くなんて、はつきり言つて不可能だ。

じゃあ、デュライの視点から考えてみよう。

まず、デュライが自分の情報を流してゐる人間がギルド職員だと至つた理由は簡単だ。それ以外に無いから。じゃあ、僕とレー＝デがあの場に居合わせたのに、僕ではなくレー＝デだと確信した理由はなんだろう？ レー＝デとデュライの間に、デュライの襲撃以前に、接点があつたかどうかは僕には分からぬ。逆に、僕とデュライはキューブ修理の開始の日に一緒に行動したという接点がある。その時、ミシェルに質問をしたのは僕だったし、デュライに対して協力的だつたから、僕を選択肢から除外したと考えるのが自然だろうか。

そういうえば、ミシェルへの質問でデュライを狙つていたという回答を得た事で、デュライがその事に探りを入れた結果レー＝デが連れて行かれ危険に遭つてゐるのだとしたら、完全に僕のせいじゃないか？

さつきの事で、ミシェルがデュライを狙つていた理由がほとんど偶然と判明した以上、レー＝デはミシェルの件では関与していないのだから、今レー＝デとデュライが向かつてゐる先の相手は、デュライとは何も関係が無いかもしぬないけど、デュライに襲われるかも知れ

ない。レー・デもそれに巻き込まれるかも。何にせよ止めないと！…
・でも一体何処へ行けば？

結局、思考は同じ所へ辿り着く。

「うなつたら、とにかく探し回るしかない。ヒントはレー・デの言つた奴は依頼人じゃないという言葉。逆を言えば依頼人以外の全員が容疑者。はつきり言つて果てしない作業になる事受けあいだ。もつとヒントを出してくれればと思う。でも、僕やミシェルが首を突つ込まないようこうしたと取れなくも無い。歯痒さだけが残る。行き先を推測するのを止めて、物理的な考えで絞込む事にした。あの時、角を曲がつて見えなくなつたという高い方の可能性に賭けて、リザリア東側の街をパカパカで己の字のように疾走する。何かがあれば人だかりが出来ると考えて、可能な限り広範囲を捜索する。

僕の借り家前を通る道で、見覚えのある人物がちょうど家の前に佇んでいる様が見えた。近寄つて行けば、次第にはつきりとそれが探している人物である事がわかつた。

「レー・デ！」

「・・・リキット・・・ミシェルは？」

パカパカを降りる。ミシェルはずつと馬首に纏わり付いている

「うん、大丈夫みたい・・・レー・デの方こそ」

「俺は大丈夫だ。ただ案内しただけだ」

「・・・その人は襲われなかつたの？」

「ああ、彼の探していた人物ではなかつたらしい」

「そつか、みんな無事で良かつた」

「どこまで心配してんだけお前は」

「・・・・・・・巻き込んで、本当に悪かつた」

「いいんだ・・・そんなことより、ミシェルがカレーを楽しみにしてるんだ。一緒に食べよう

「・・・ああ、そうだな。ありがとう」

僕の笑顔はレー・デに少しでも安心を与えられただろうか。言葉は

不安を取り除けただろうか。わからない。

家灯りが道をぼうつと照らす中、ミシェルを呼べば、パカパカも彼女の後ろからついて来る。

お腹の空いた男2人でああだこうだと、ミシェルにカレーの作り方を伝授する。具が僕とレーデの好みの違いでちぐはぐな大きさになつたり、炒めるのか煮込むのかミシェルを困惑させたり、カレー粉の量や隠し味なんかでも言い合つたけど、それが今日は特別楽しかつた。

そうして出来上がったカレーは、間違いなく僕達の渾身の一品だつたが、味見などしていなかつた。だから、ミシェルがそれを口に運ぶ様を僕達は固唾を呑んで見守つていた。

「んー！ カレーうまい！」

その言葉を聞いた僕達は、笑みを交わし、拳を突き合させた。

レーデは特に何も言わなかつたし、僕も何も聞かなかつた。いつでも会えるのだから、落ち着いた時にでも事情を話してくれればそれでいいと思つた。ただ、一つだけ約束をして欲しくて切り出した。「レーデ、僕は頼り甲斐がないかも知れない。でも、頼つてきて欲しいんだ。・・・ 親友だと思ってるから」

「・・・ ああ

「一つ、一つだけ・・・ 私欲のために誰かを貶めるような事はしないつて、約束して欲しい」

「・・・ わかった、約束する。・・・ お前と、ミシェルに誓おう」

レーデは真つ直ぐに僕を見ていた。そして、今後ソルバーの情報を売つたりしないと、ここに誓いを立てた。

朝早い家の灯りがぽつりぽつり消え始めた頃、レーデは大きく手を振つて帰つていつた。最後に見せた笑顔が、大丈夫だと伝えていたのだと僕は思つた。このまま眠つてもいいくらいには夜が更けていけど、頭の中がもやもやしている。パンサーの話を聽かない事に

は、納得がいかなかつた。レーーテを見送つてそんな風に考えていたのは、扉を閉めようと/orするまでだつた。

家のドアを閉めようと/orして、何かにぶつかつて閉じ切らないのだ。

「よお？」

扉と玄関の間に足を挟んでいた人物が声を掛ける。

「・・・デュラライ」

来た理由はおおよそ察していたが、このタイミングで現れるといふ事は、事前に僕の家を知つていていたか、レーーテが帰るのを待つていたかだ。事を荒立てるようなことをせずに、こうして底知れぬ恐怖を与えてくるけれど、ミシェルとデュラライを会わせたくない僕にとってはここで誤解を解いて終わらせられるのは好都合だつた。

「来た理由はわかつてゐる。ミシェルが言つてた、君を狙つたつて話でしょ？」

「俺は締め上げてやつても構わんが・・・ガキから直接聞くのは無理そなんでな」

上位のハンターといふのはこいついう人種ばかりなのだろうか。だとしたら好きになれそんに無い。考えてみれば厄介事の種はみなデュライだつた。それでも、これで終わりだと思えば、我慢も出来るところのもの。

「あれは誤解だよ。・・・薬の素材が高値で取引出来ると聞いたミシェル・・・カラスが、儀式場跡から出て来た君を、君の持ち物を狙つただけ。・・・彼女はもう、盗みはしないし」

「・・・そうか」

少し残念そうに答える。

「ところでお前、浮浪児を愛玩する趣味でもあるのか？」

僕はデュライを強く睨み付けるが、彼は臆する事無く続ける。

「浮浪児つてのは、成り行きや不幸でそうなつてるんじゃない・・・・・なるべくしてなつてるんだ。浮浪者には浮浪者たる理由があるんだよ。・・・愛着なんて寄せてると足元掬われるぞ？」

「デュライー！ それ以上の侮辱は許さないぞ！」

「純然たる事実ってヤツだ・・・それに、侮辱とは何だ。お前も浮浪児だったのか、とてもそうは見えないが？」

そこへ異変に気付いたミシェルがやつてくると、すぐにデュライを見つけて敵を見る目に変わり、右手にパンサークローが現れる。怒鳴つたのがまずかつたか。

一方、デュライは玄関の外で壁を背にしたまま、ミシェルの様子を伺つてゐるだけだつた。

「よお、ガキ。また凝りずに負けてみるか？」

「何しに來た！」

「・・・・言つておぐが、お前の敗因は予測や戦術がどうのつて事じやない。もつと根本的な・・・力、速度、体格の差だ。・・・今のお前じや、俺の剣を防ぐことしか選択肢がない。・・・避ける事も、止めきる事も出来ない」

言つて壁から距離を取る。剣を抜くのかと思ひきやそのまま遠ざかつていいくデュライ。

「せつかく面白い武器を持つてるんだ、余す事無く生かす事を考へるんだな・・・」

「どこへ行く！」

「・・・もう一度と会う事も無いだろ」

赤髪の少年は振り返ることも無くそう言つた。僕たちは彼を見送るでなく、その姿が見えなくなるまで見ていた。彼の姿を照らしていた家の灯りが消えたのと、視界から彼の姿が消えたのは同じ瞬間だつた。

(パンサークロー、話がある)

(宣しい)

(二人きりで話せない?)

(構わぬが、今日はミシェルの精神疲労も激しい。明日でとは叶わぬか? お主が魔力を供給すると言つならば別であるが)

精靈に魔力を供給するというのは分かる。ミシェルの精神疲労が関係しているというのはどういうことだらうか。そもそも、二人きりで話そうと思つていので、ミシェルは関係ないと思つていたけど事情が違うのかもしない。ともかく、話をしたかったので、魔力を供給すると承諾する。

しばらくするとミシェルがパンサークローを外して僕に渡してくれる。それを手にした途端、眩暈を覚え、吐き気を催す。余裕無くトイレへ駆け込む。

(なにこれ・・・気持ち悪い)

(儂に魔力を供給する事で、精神的な負荷が掛かつてある・・・魔力とは精神から捻出する物だ。魔力を供給する事は、即ち精神力を与えるも同じ)

(ミシェルはいつもこんな感じなの?)

(お主は精神力も薄弱であるが、他にも相性が悪いと存する・・・対話は出来ぬが儂の存在を消せば、精神力の消費を抑える事は可能(大丈夫、魔力ってマナの事ばかりだと思ってたけど、実際には違うんだね)

(マナとは魔気の総称、魔力とは人間や精靈の精神を媒介とした純度の高い魔気の事である。従つて間違いでは無い)

(この会話をミシェルが話を聞くことは?)

(そうだの、お主からの念であれば伝わる事はない。儂の方からの問い合わせであれば、儂の念次第で一方だけ或いは、両方と話すことが出来る。無論、一定距離内である必要はあるが・・・一時、慎もう)

(じゃあ、まず君の事を聞かせて欲しい)

(すまぬが、身の上は話せぬ、容赦願いたい。そうだの・・・)

身の上話以外、自分自身・・・パンサークローの特徴について話をしてくれた。仮名パンサークローは闇属性の精靈で、姿ではなく、存在の有無を切り替える事が出来るのだと言つ。存在を消している状態の方が安定でき魔力の供給をほとんど受けずに居られるらしい

が、念話などのあらゆる行為が出来なくなるとの事。

（ありがとう。・・・じゃあ、ミシェルとテュライが戦つた時の詳しい話だけ）

（先程も言つたが、儂は存在の有無を自在に操れる。契約主の周囲であれば、瞬時の移動も可能。ただそれはミシェルの魔力消費が激しい故、それ以上に危険な時以外には行わない）

つまり、ミシェルが壁にぶつかる前に、ふさふさの手袋部分をクッシュションにしたということだろう。

（カラスと名付けたのは・・・？）

（儂の失敗である。ある時まるでカラスの様だと申した。それ以後カラスと名乗る様になってしまったのだ）

（じゃあ、パンサーもミシェルの本名は知らないってこと？）

（残念ながらその通りだ。従つてお主がミシェルといつ名を付けてくれた事には非常に感謝してある）

気持ち悪さが先立つてあまり聞けなかつたけど、ミシェルの精神力が強くなつてきた事によつて、具現化して戦闘や長い会話を出来るようになったのが割と最近らしいという事で、それ以前はここぞという時くらいしか具現化していなかつたとの事を教えてくれた。つまり、ミシェルがコミニケーションを取る姿勢が薄いのもおそらくその所為と考えられた。

（くつ・・・最後に、僕が君と通じたつて事は仮契約をしたつてとつていいのかな？）

（異なる。お主にも儂にも契約に至るほどの大した利点及び欠点は生まれぬ。ミシェルの事を通じてお主を信じ、会話を望んだという程度、通じたという言葉が合つ。仮に、契約に至つたとしてお主は闇属性の精靈と相性が悪い故、儂を存分には使えぬよ）

（えつと、ミシェルの方が僕より子供なのに？・・・うつぶ）

（勘違いしないで貰いたい。心と精神力とは異なる。精神力は体力と似ておる、力の依存する部分が異なるが、心の持ち様で調子に差があるといつ共通点がある。・・・力の枯渇が死に至るといつのも

共通点である「ひ」

(ぐうつ・・・ もう限界だ)

(では戻るとしよう、この様な対話も偶には良いものだ)

手に持つた爪型武器が消えていった。

それほど時間は経っていないはずなのに、僕は疲労困憊といつて差し支えないほど、疲れてしまった。魔力を供給する事がこんなに大変なことは思わなかった。

トイレで用を一つ済ませ扉を開けると、そこにはミシェルがいた。

「大丈夫か、リキッド？」

「ちょっと疲れちゃったけど、大丈夫だよ

「ん

「僕はもう休むよ。・・・ミシェル、一人で着替えて寝られるね？」

「おう！」

弱っているのを隠すよう意識して、自分の部屋へと歩く。部屋に入ると足取りも覚束ず、そのままベッドに倒れこむ様に身を投げ出した。ベッドの柔らかい肌心地を感じ、意識が遠くなつていった。

キイな仕事→解決→（後書き）

自慰行為です。すみませんでした。全く反省してあります。

紳士と淑女？（前書き）

「」の作品は、読みにくさをMAXに設定しております。

性的な描[写]やいわゆるH口描[写]、萌えみたいな描[写]は「」ません、
「」メテイータッチの笑える描[写]、愉快で痛快な描[写]は「」ません、
”戻る”か”閉じる”ボタンを計画的に「」利用ください。

熱いものが胃を刺激して、まるで胃を自身が消化しようとしているように、息苦しい。そして極偶に、ズキズキと頭痛がする。パンサーに魔力を供給した影響か、体調が良いとは言えないけど、意識ははつきりしていて風邪のような病気とは違つ。

眩しい太陽の光を見て、僕を心配してくれたのだろう、隣で眠っているミシェルの頬を一撫でする。

「・・・ん

「・・・おはよう、ミシェル」

「ん～～～、おはよー」

すっくと立ち上がって、ベッドの上から飛び降りる。ミシェルは今日も元気だ。ミシェルに負けるもんかと、勢い良く立ち上がった僕の腰がコキコキと軽やかな音を奏でる。少し年老いた気分になる。あつという間に着替えて来たミシェルに催促される様に見られながら、僕も着替える始める。今日のミシェルの服装は、茶と黒のスマートなワンピースと、白い丈の短いパンツを穿いている。きっとミシェルにとってスカートというのが感覚的に無いのだろう。僕としてもスカートを無理に着させようとは思わない。

「よし、行くぞ」

「パン！パン！」

嬉々として付いて来るミシェルを見ていると、パンサークローの事を忘れてしまいそうだ。凶器に宿つた精靈と、契約している子供。ただそういう言い方をしてしまうと、関わり合いに成りたくない思ひが先立ってしまうのではないだろうか。少なくとも、今後ろから追つて来る子供は放つて置けないと思われる、か弱い少女にしか見えない。

「ミシェルちゃん、いらっしゃい

「パン、うま、美味しかった！・・・です！」

そう言つ様に先に教えておいたのだけど、想像以上の無理があつたようだ。

「そうかい、今日は何にしようか？おばちゃん、サービスしちゃうよ」

「僕にはサービスしてくれないのに？」

「そりや当たり前だろ？」

はははと笑い声が交じり合つ。息をするほど焼き立てパンの香りが鼻をくすぐる。

「ミシェル、好きなの4つ選んでいいぞ？」

「わかった！」

時間が掛かるかと思いきや直ぐに大きい物から順に4個選んだミシェルに、僕は一瞬言葉を失つた。

「沢山食べたいのは分かるけど、今朝食べる分だけだぞ？・・・」

レだつたら、今日は1つだけになっちゃうぞ？」

「んつと、選び直す」

1つでも朝食だけではとても食べれないパンを指差して諭してやれば、ミシェルは残念そうに答えて、陳列されたパンの一つ一つを見比べている。それほど大きくも無いパン屋の客は多く、オバサンは忙しそうに対話をしながらお客様を捌いていく。僕は手持ち無沙汰にミシェルに付き添つていた。

結局、朝食のメニューはメープルデニッシュ、たまごパン、パインパイ、アップルパイの4つだ。昨日買ったアップルパイがあるのは、僕にとってのクロワッサン的な位置付けなのだろうか、僕はどうしてもクロワッサンともう一点という買い方をしてしまうのだ。

パンを買うと何処から持つてきたのか、店主が飴玉をいくつかミシェルに分け与えた。店内にはまだパン屋のお客さん達が小さな列を作つていたので、紙袋を受け取つた僕はそそくさと喫茶店へ向かう。

喫茶店の店内は相も変わらず、蠅燭の火がゆらゆらと揺れていって、特別ゆっくり時が進んでいる気にはせる。

「いらっしゃい」

「薄めの紅茶とお勧めのジュースを」

「昨日前と同じやり取りも、何故だか誇らしく感じる。」

空いた席に座りながら、人も疎らな店内に、金色の鎧を申し訳程度に付けた、筋肉の塊の様にがつしりした肉付きの大男と、白い軍服のような制服を着こなす、清潔で感じの良さそうな少年という、印象的な二人組みを見付けた。大男は短めの黒髪を後ろで縛つて、こんがりと日に焼けた褐色の身体つきは筋骨隆々を体現しているが、顔は筋肉で固まっておらず柔らかい表情も出来そうだ。少年はさらさらと柔らかそうな巻き気味の短い金髪で、表情も柔らかい、筋肉の大男と一緒に居る為か華奢な体躯に見える。

間も無く、二人組みは席を立ち、店の出入口へ向かう途中、僕と視線が合つと大男が徐にこちらへ向き直り、真っ直ぐ僕を目指して歩いてくる。

「よおアンタ、この街のギルドの人か?」

ギルドの制服を着ているから声を掛けてきたらしい。

「はい、リザリア東ギルド職員です」

「ちょうど良かつたぜ、さつき近くのギルドに休業の張り紙がしてあつたんで、どうしようかと思つてた所なんだ」

「すみません、キュークの故障で他のギルドに回つて頂くしか・・・」

「それだ、他のギルドの場所を知らないんだが?」

「そうですね。・・・中央ギルドが近いんですが場所が複雑で、大通り沿いにある西ギルドへ向かうのをお勧めします」

「そうか、ありがとさん!」

明るく景気の良い野太い声で礼を言つて出て行く大男に、こちらにペニシリとお辞儀をして、付いて行く少年。

「いまの誰?」

珍しく尋ねてくるミシェル。

「さあ？初対面だったからね。格好からして、多分ハンターじゃないかな」

「ふーん・・・」

自分から聞いてきた割に興味無さそうに応えて、紙袋を広げ飲み物の到着を今か今かと待ちかねているミシェルに、マスターが口を開く事無くそれらを置いていく。今日のジュースは爽やかなオレンジの香るジュースだった。

「リキッド、半分こして！」

パンを手で千切るもそうそう上手くはいかず、大小様々なパンの形態が出来上がる。大きい方をミシェルが更に千切つて綺麗に半分にしようとするが、当然包丁で切る様にはならない。形の残つての方をミシェルに渡して、無残に散つたパンの欠片を頬張る。

「・・・いただきますは？」

少し尖つた口調には、母親のようだった。

「はい、頂きます」

「いただきまーす」

ミシェルと過ごしているとハツとさせられる事が時々ある。しつかりしなくちやと思う裏で、僕が親になつたらこんな感じになるのだろうかと考えたりする。だとしたら、頼りない父親かな、なんて。つて、10歳位しか違わないのだから兄妹が正しいのだけど。

たまごパンを口にすると玉子の香りが広がり、ふんわりした食感がたまらない。噛めば噛むほど、しつこくない甘さと、しつかりとした焼きたてパンの風味が口一杯に広がる。ミシェルが居なければ買わなかつただろうたまごパンに、クロワッサンに変わる趣向の新発見をみた。しかし、ミシェルの評価は次の通りだった。

第一位アップルパイ、第一位メープルデニッシュ、第三位パインパイ、第四位たまごパン、第五位オレンジジュース。つくづく味覚は合いそうに無いけど、オレンジジュースより紅茶の方が良かつたと言つてくれたのは嬉しかつた。ただ、砂糖をもつと増やせば負け

ると直感した事は内緒にしようと思つ。

パカパカの背に乗つて出勤するのもまだ2度目なのに、随分前からそうしている気には、昨日長い間、騎乗していたせいだろう。手慣れた仕草でパカパカを厩舎に置いて、ギルドへ向かう。

西、ギルドの中にはネストとマルガが一人組みの冒険者風の男達と話をしていた。つい先程喫茶店で会つた大男と少年だつた。

「おはようございます！」

「おはよー」

ギルド職員の二人はこちらを一瞥して話を続けていたが、大男だけはこちらを振り返ると大きな声を立てた。

「アンタはさつきの！助かつたぜ、兄ちゃん！」

「どうも」

一礼だけして奥のカウンターへと足を進めると、やはり目を輝かせてマルガが話の隙間を縫つて話しかけてくる。

「お知り合いなんですか？」

「今朝、ギルドの場所を教えただけだよ

「なんだ～、詰まんないです」

「そうだろうけど、ハツキリと口にするのはどうかと思うよ。

「それではこれで、ハンター登録は完了です。こちらがハンターライセンスです。使い方は先程言つた通り。もし失くしてしまつた場合、1000円で再発行出来ますが、失くさない様に願います」「はい、ありがとうございます」

ネストは金髪の少年にハンターライセンスを渡す。見比べて初めて分かることだけど、大男と同じ、大柄で肌の焼けた筋肉質なネストも、大男と比較すると小さく感じる。と言つても僕と比較すれば十分大きい。

ギルドのライセンスは拳大の横に太く赤いラインが入つた銀製カードだ。系統毎に塗装されたラインの色が違い、ハンター系統のライセンスは赤色。銀製であるのは、流通している金属の中でも一番マ

ナを帯び易いのが銀だから。マナを帯びさせて置く理由は、当然キューーブに情報を読み込ませるため、もつとも登録者の番号くらいしか情報として含ませて置けないわけだけ。

「んつじゅ、引き続きよろしく頼むぜ。・・・俺は野暮用の方を済ませてくらあ」

「はい、いつてらつしゃい」

少年を残し大男はその筋肉に似合つた大型のハルバートを担いで、その場を後にした。

「それでは～、Cランクハンター認定試験ですけど・・・まず筆記試験、キューーブによる面接を今日中に済ませ、その結果をもつて推奨クラスモンスターの所へ明日以降に行く。つて感じでいいですか？」

「ええ、はい。大丈夫です」

「ではでは、こちらへ～。さくっと筆記終わらせちゃつてください」マルガの対応は非常に気さくで、人によつては反感を買ひそうだつたけど、少年は物腰が低く、笑顔で受け應えていたので接客については何も言わないことにした。それより、疑問に感じた事はそこではなくて。

「Cランクハンター試験つて？」

「ああ、Bランクハンターの推薦があるから特別試験つて事だな」そう、Cランク以上のハンター試験は開催日時と場所が決まっていて、本来それ以外で試験をする事が無い、Bランク以上のハンターの推薦無しには、恐らくさつき出て行つた大男がネストの言う推薦したBランクハンターなのだろう、あの筋肉量であれば納得がいく。

「そーなんですよ、なのでリキットさん。不束者ですが、よろしくお願ひしますね！」

いつの間にか戻ってきたマルガの言葉は意味不明だった。

「はい？」

「あー、試験官なんだが・・・リキット、お前さんとマルガでやつ

てもらう事にした。つていう意味だ」

頭痛に悩まされている様に片手を額に当てるネスト。

「ええー！！！・・・僕、試験官なんてやつたこと無いですよー！」

「誰でも最初はー、初・体・験なんですか？」

もつともな事を厭らしく言う、口に人差し指を添えた、赤縁眼鏡のマルガ。この人と一緒というのが特に不安だ。

昨日はミシェルに付きつ切りで感じなかつたけど、このマルガレットという妙齢の女性は、赤縁眼鏡とそばかすに隠れているが結構美人だ。ギルド制服のローブ越しには伝わり難いが、出ている所はしっかりと出ていて、スタイルも良いと思う。髪を一つに分けて束ねているが、その水色の髪束は細く、彼女の感情の起伏で飛び跳ねそうだ。何よりその触覚の様に伸びた髪が踊る度、花の香りが鼻腔を揺るのだ。

「まあ、試験官は2人必要だ。転任してきたばかりのお前さんを一人残す事は出来んし。マルガはこう見えて、本場の試験官をしていた経験もある。・・・それに、俺とあの少年の名前が似てて面倒なんだよ」

「そうですよお、だから一人手に手を取つて、そのままゴールインなんです！」

完全にマルガに遊ばれているのは放つて置いて、資料を見れば確かにその名前の欄には、ネスティと書かれていた。似てるつていうか、気を配つていなければ言い間違えと聞き間違えの多重事故しか起きない気がする。

「なるほど。・・・とこりでマルガさんつて試験官だつたんですね？」

「ですです。・・・えつと、そやつて私の過去を調べ上げて、私の事を裸にしていくつもりなんですね・・・リキットさんのエッチ違います！」

このくだりをどうして欲しいんだこの人は。僕では到底処理できない難件ですよ。ヘルプミー。困り果て周囲を見回すと、いつの間

にか掃除を始めていたミシェルが視界に入る。淡々と掃除をこなすミシェルを見ていると自分も仕事をしなくちゃという気になる。

「よし！やりましょー！」

「もうリキッドさんつたら大胆なんだから・・・」

両手を頬に当て照れるような仕草を見せるマルガ。ミシェルに気を取られていた間に、何かを言っていたようで、それを弁解するのにやたら時間を使うこととなつた。

「あ、あの。これでいいでしょーか？」

少年がおずおずと、埋め尽くされた解答用紙を持つてくる。

「あ、じゃあ次はこつちを解いてください。・・・」これは僕が採点します！」

ハンター試験の筆記問題はあらゆる部門の問題が出題されている。各ギルド系統の中級問題は勿論、計算問題、モンスター知識問題、地理学、歴史、宗教・・・とにかくあらゆる種類の問題が出される。現実的には有り得ないが、それが仮に〇点だったとしても、失格となるわけでない。この後に行われる面接の方が重要で、ちょっとした交渉術が問われる。そして筆記、面接、実績を考慮して、退治するモンスタークラスが決まり、その等級のモンスターを倒せば、晴れて〇ランクハンターになる。という訳で、人手が色々と必要とされる上、実績の無いFランクからも〇ランクになれるというのもあって、志願者も多い事から恒例開催型の試験となつていて。

昼食を交代して取る様にしていて、最後は僕とミシェルの番、外に出ても食べたい物もなくふらふらと街を歩く。

「そういえば精霊つて何を食べるのかな？」

「パンサー？・・・ん~、何も食べない

「そつか、魔力つて美味しいのかな？」

「わかんない」

右手を顔の前へ置き、目を瞑るミシェル。

「パンサーは出さなくつていいからね！」

「ん」

「ミシェルは・・・」

ミシェルは何を食べたいかと聞いたら、きっとパンと答えるだろうと思つて止めた。思えば、パン、肉野菜炒め、コンソメスープ、スペゲティ、カレーしか食べさせて無いんだよね。

「ミシェルが食べ物屋さん選んで。ただし、パン屋とカレー屋はダメ!」

「ん~?」

雑貨店の中を必死に覗こうとするミシェルに、飲食店の看板にはフォークやナイフ、スプーンの絵柄や造形があるとヒントを出すと、直ぐフォークとナイフの描かれた店を見つけ指差す。そこは肉屋に隣接したハンバーグ専門店だつた。店内は子供連れの客が多く居たが、僕にもミシェルにも好評で値段も安く、いい店を見つけたと思わせるに十分だつた。

ただ一つ、やたらぶらついた所為もあって、ギルドから大分離れた位置にあるという難点があった。

「もお、リキッドさん何やつてたんですか?面接始まっちゃいましたよ、早く採点手伝つて下さい!」

マルガの非難を浴びながら、すじすじと採点を手伝つ。

この短時間で膨大な出題範囲を誇るハンター試験の解答用紙を埋め尽くすというのは、点数はまだわからないが、かなりの博学の持ち主なのだろう。当の本人ネスティ少年は今、魔法通信で面接官と話している。

一方、やる事の無くなつたミシェルはネストに昼休憩中に買った絵本の読み聞かせをして貰つてゐる。文字が読めなければ何屋かも分からぬ店も少なくない。今後、ハンターになつても文字が読めないとキューブの操作も危うい。文字の書きは出来なくとも、せて読めるようになる必要があるのだ。

しばらくして、別室から出て来た少年は深い一礼とともに。

「面接終わりました。ありがとうございました」

「お疲れ様です！……筆記、面接、実績……産まれ立てホ力ホ力のハンターなんで無いんですけどお。が加味されて倒すべきモンスタークラスが決まりますのでえ……採点もまだ終わって無いので、また明日以降に来てくださいね～」

「はい、ではまた明日お願ひします」

礼儀正しくまた一礼するとゆつくりと出口に向かう。細身の剣を腰にしていた、以前に会った同じ年位の赤髪の少年をふと思わせるが、彼と違い、既に僕の中での金髪の少年の位置付けは紳士になつていた。僕も席を立つて一礼して見送る。

「リキッドさんがそんなんじや、これからのお夫婦生活が心配になつちゃいます～」

仲裁してくれるネストさんや、一蹴するミシェルが絵本の読み聞かせになつてしまつて、今この場はマルガの独壇場と化すのであつた。

「それにしても……凄い」

解答用紙を埋め尽くしていた時点で博学とは思つたけど、実際の正解数は6割に及び、正答と呼べないまでの回答にもある程度の考察が書かれていた。これがどれ程凄い事かを正しく解説するには数時間掛かるのでないけど、受験者の平均正解率が2割強、合格者の平均正解率が5割弱なのだ。それは勿論、老若男女問わない場合。

「ですねえ～・・・」

「採点報告上げたら、一緒に飲みに行かないか？」

感嘆の声を上げる僕達に、ネストが空きグラスに口を付け呑んで合図する。

「でも、ミシェルが・・・」

「ミシェルちゃんも満足な、美味しい料理のお店知つてます！」
マジです。そう言う彼女の熱意と剣幕に押されて、行つた店は本当に料理の美味しい酒場ではなく、各種アルコール飲料が置かれた

庶民的なレストランだった。

ネストさんは飲みに誘つた張本人だったけど、それほど飲まず、食べてばかりいた。反面、顔も真っ赤にしながら声高らかに笑うマルガは既にワインを2本空けていたが、止まる気配を一向に感じなかつた。ミシェルはネストの横に座り、色々な種類の料理を分け与えられていた。僕はと言えば、完全にマルガの話し相手にさせられ、細々と飲み食いした。それでも数時間も長居すれば相当な量飲める訳で、特にマルガの酒豪ぶりには驚かせられた。

帰る頃には酔いも回っていて、パカパカの背から何度も落ちそうになつた。ミシェルも眠そうにパカパカの首を抱き枕にしている様にしがみ付いていた。

酔つて風呂に入つても良い事は何も無くて、風呂に浸かりながら眠つて、死にそうになつたのを憶えている。そんな僕は、ミシェルを伴つてさつとシャワーを済ませ、着替えてベッドに潜り込んだ。今日はマルガに振り回されたような、そんな一日だったと振り返る間も無く、意識は地へ落ちていく。

紳士と淑女? (後書き)

お慰行為です。すみませんでした。全く反省しておつまむ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7196w/>

OLFEED～ギルド職員の仕事～

2011年10月10日03時23分発行